

The Community

コミュニティ

【特集】

祖父母と孫

1994

NO.

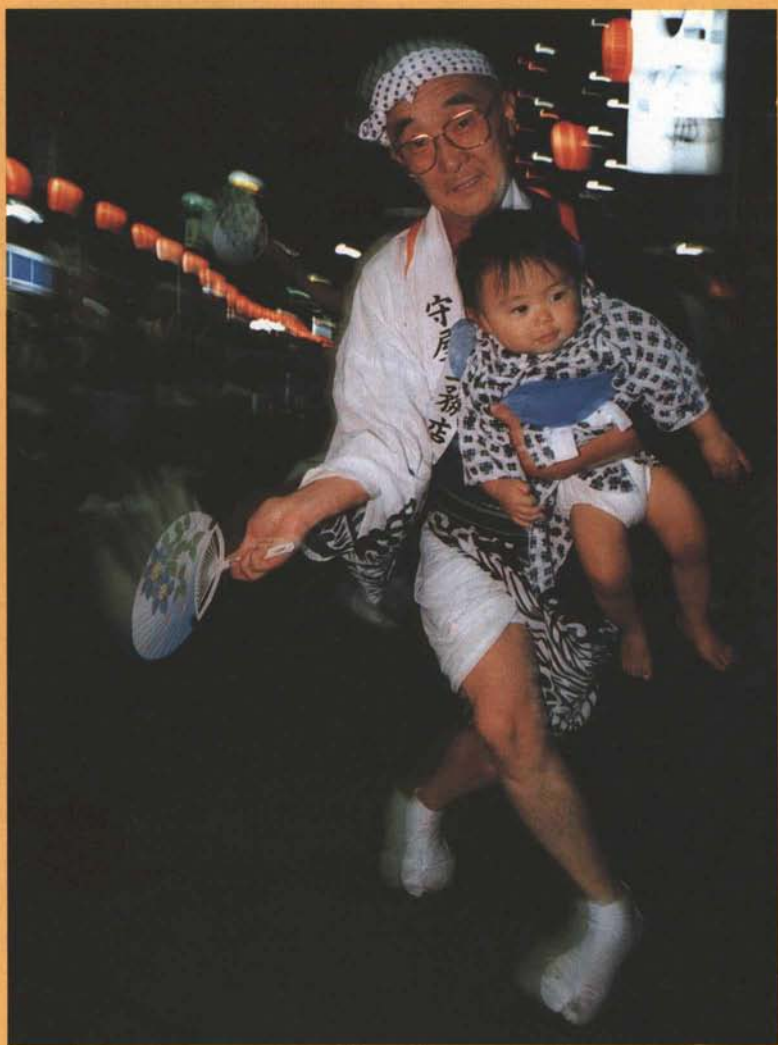
107

人口高齢化と少子化が進むなかで、
祖父母と孫の関係にも
大きな変化がおこっているようだ。
家族のなかの祖父母と孫、
社会のなかの高齢者と子どもの
現在と未来をさぐる。

世界の街から

24

お年寄りと子どもの風景



孫と一緒に

(1993・5 日本カメラ カラープリント部門金賞)

撮影：原田恵一



この孫が可愛くて、可愛くて（ウクライナ・キエフの戦士の墓にて）



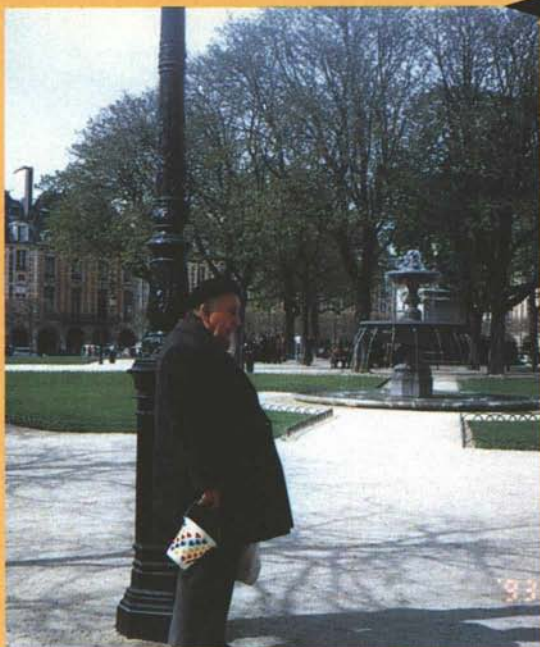
孫娘をつかまえない鬼ごっこ（イギリス・ストラットフォードの公園にて）



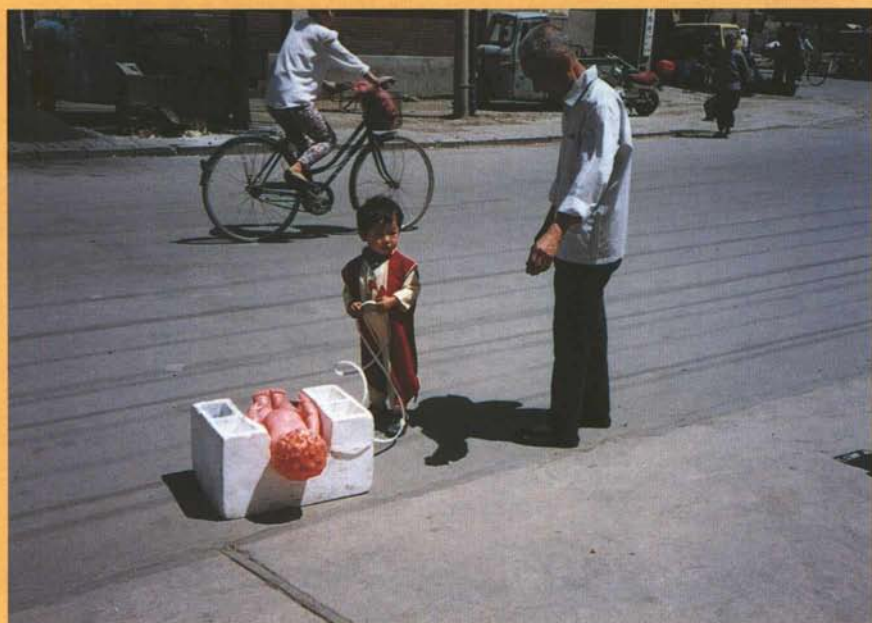
一人っ子孫はおじいさんの宝物（中国・北京のイワ園にて）



三つ子の世話は二人がかり（ハワイ・マウイ島の動物園にて）



孫の遊びを見守るおじいさん（フランス・パリのボージュ広場にて）



仲良し二人のお散歩（中国・天津市の人民法院前にて）

The Community

1994 No. 107

(財) 地域社会研究所

●口絵・世界の街から②④「お年寄りと子どもの風景」原田恵一・湯沢雍彦

●巻頭エッセー「花とコミュニティ」天野郁夫

●特集「祖父母と孫」

座談会「孫は来てよし、帰ってよし」

平成ヤングおばの弁 沖藤典子

「お祖母さん」は「お婆さん」か？ 安藤 究

私の孫たち ジョージ・T・ジョーンズ

マイホームはるみ 世代交流型の複合施設

●フアイアセーフティ・フロンティア94 開催

●連載

防犯とコミュニティ③「地域ぐるみの防犯活動」警視庁防犯総務課

からだで知った日本②「長野・黒姫山麓、お年よりの笑顔」アン・マクドナルド

教育じろん①⑥「偏差値教育は本当になくなるか」曾我部泰三郎

家族の風景②「お父さんの子育て」牧野カツコ

シルバー通信「淋しい女たち」川原千寿子

中高年のライフスタイル⑨「とりあえずご同伴で」藤原房子

読者の声

88

ブックレビュー

90

86 84 82 80 78 75 74 71 68 65 62 10 9 6 1

花とコミュニティ

天野郁夫

——あまの・いくお／東京大学教授・地域社会研究所評議員



私のいま住んでいるところは、杉並区の北のはずれに近い。練馬区と境を接している。住宅地を通って歩いていけば、三〇分ほどで井草八幡宮をへて善福寺池につく。といってもご存知ない方が多いだろうが、武蔵野の面影をとどめる野趣にとんだ池である。

その池までの散歩は、季節それぞれにたのしいが、とくに花の季節がいい。大邸宅、小邸宅、さまざまに並んだ街並みを通り抜けていくと、とりどりの花に行きあたる。コブシ、モクレン、サクラ、ドッグウッド（花水木）などなど、ひと様の庭の花を楽しませていただくわけである。わが家の猫の額ほどの庭にも、花の咲く木がないではないが、なに分にもせせこましい。枝を存分に張らせ、一面に花をつけさせるだけの空間はない。ドッグウッドなど、花のつきがあ

まりに悪いので、植木屋さんに枝を切りすぎるのでは、と抗議したら、これ以上枝をはらせたら、どうにもなりませんよと、一蹴されてしまった。

それだけにのびのびと枝を張り、見事に花を咲かせている木をみかけると、うれしくなってしまう。もちろん、そんなぜいたくな眺めを、通りがかりの赤の他人に提供してくれるのは、大邸宅の庭である。今年も、ひと様の庭の見事なサクラを、あちこちで楽しませていただいた。

しかし、そんな大邸宅も大樹も、年とともに姿をけししていく。大邸宅のあとにマンションが建ち、あるいは我が家のような小邸宅がならぶ。あまり手入れの必要のない、花と無縁の木々が植えられる。あるいはちんまり刈りこまれた、盆栽のような花木がとってかわる。大邸宅の庭から道に張り出した、それゆえに目を楽しませてくれた大樹の枝が無残に切り落とされ、変に明るい空間に変わり、花はブロック塀のなかに囲い込まれてしまう。楽しみが年々、減っていくのもまた、さげがたい、きびしい現実であるようだ。花の季節に、サクラの大樹を楽しまない人はいない。しかし、である。花の季節をすぎると、他人の庭や道に枝を伸ばしたサクラは、厄介ものになる。毛虫がつく、うっとうしい、落葉で汚れる。そうした人々の苦情が、サクラをさらわれものにする。この間、友人から三〇年たったサクラの木の始末に、往生している話を聞かされた。枝を張りすぎて、御近所から苦情が出るので、切ろうと思って植木屋に相談したら、ウン十万円かかるというので進退窮したというのだ。

これではそのうちに、サクラに限らず、のびのび枝を張った大樹の花は、公園や杜寺、それに学校の庭でもなければ見られなくなってしまうだろう。事実、大・小を問わず、新築の家の庭に、大木になりそうな花木をみることは少なくなった。「ゆたかさ」の時代というが、花木にとって

はなんとも世知辛い世の中になったものだ。

散歩の楽しみ、季節ごとの楽しみが着実に失われていくコミュニティ。ひとを楽しませること
できない、ちっぽけな家の住人にとって、複雑な思いの花の季節であった。





特集

祖父母と孫



〔座談会〕

孫は来てよし、帰ってよし

出席者（敬称略・発言順）

湯沢雍彦……ゆざわ・やすひこ／お茶の水女子大学教授／地域社会研究所理事

並木正吉……なみき・まさきち／（財）食糧・農業政策研究センター理事長／地域社会研究所理事

福島 章……ふくしま・あきら／上智大学教授

清水美知子……しみず・みちこ／（財）兵庫県長寿社会研究機構 家庭問題研究所研究員

司会

加藤恭子……かとう・きょうこ／上智大学講師／地域社会研究所評議員

「孫は人生の最後に与えられる宝物」だといわれる。

が、共働き夫婦が増えるなかで、祖父母にも子育ての役割が……。

社会の変化にともなって、祖父母と孫の関係も変わってきたようだ。



▼私の祖父母歴

加藤 地域社会研究所の評議員をさせていただいております加藤でございます。きょうは、お忙しいところをありがとうございます。

祖父母と孫のさまざまなかわりあいについて話していただきたいのですが、まず皆さまの“祖父母歴”という、個人的なことから伺いしたいと思います。私自身は祖母になりたてでございます。八か月の別居の孫をもっております。

では、湯沢先生からお願いいたします。

湯沢 私も祖父になってまだ新米のほうですが、孫が二人できました。長女の子ども二人、上の子が長男で三歳三か月、下の子が次男で九か月になったところです。まだ、どちらも乳幼児なので、かわいい盛りなんです。そりゃ、いろいろ問題はあります。

この二人の孫とは、生まれたときからずっと同居です。いわゆる内孫二人で、外孫はなしです。

並木 私は子どもが男二人、上のほうに三人の孫、次男には二人できました。長男の一番最初の孫は今は中学二年、一番下は今度小学二年になりました。

男女別にいますと、長男のほうは男が二人で、末に孫娘ができました。次男のほうは二人とも女の子です。

孫たちとは両方とも別居ですが、長男は私の家からは車で三十分くらいのところにいます。横浜の国道16号の近くで、私の家からきわめて便利な状況になっております。孫ができてからその道が



湯沢雅彦氏

通じまして、「運がいい」と話しあったことをおぼえております。次男のほうは、孫ができてすぐにアメリカに転勤しまして、丸六年アメリカに住んでいて、二年ほど前に帰ってきました家からは二時間ほどの距離にすんでいます。だいたいそういう関係です。

福島 僕は孫が今のところ三人おり、みんな女の子です。

清水先生の調査の言葉を使いますと、初めの三年間は「近居」で、東京と横浜という関係で訪ねたり訪ねられたりということだったのですが、次の三年間は、娘夫婦がアメリカへ留学してありましたので、「遠居」ということになります。電話で話したり、日本のテレビをビデオに撮って送ってあげたりというような関係でした。そして一年ほど前に娘夫婦がアメリカから帰ってまいりました、それからは私の家で同居をするようになりました。ですから、「近居」「遠居」「同居」の三つとも体験しております。

そのうちに、孫の数も一人から二人、三人というふうにあがってまいりましたが、今は三人の女の子と同居生活をしておりますので、目の回るような暮らしでございます。

▼初孫との出会い

加藤 清水先生はお若いので、まだご経験がおりにならないわけですが、他の先生方は祖父におなりになったとき、何を最初にお感じになりましたか。そして、祖父におなりになったというところが、ご自分の生活にどういう変化をもたらしたのでしょうか。

自分のことを申しますと、私は祖母になりました瞬間に、「あ、これで血がつながった」という感じが強くなりました。



並木正吉氏



福島 章氏

それから、より永続的な変化と申しますのは、同居ではございませんのに、「寂しくなくなった」ということ。私は六年前に主人を亡くしまして、昼間、働いているときは元氣ですが、夜家に帰ると、じーんと気が沈みました。でも孫が生まれてから、そういう感じがなくなったのです。なにか人生が華やいだという感じで、それが非常に大きな変化でございました。

福島先生は、いかがでしょうか。

福島 それはありますね、たしかに。僕のところは、じつは子どもが三人いるんですが、この三人が二年ほど前に次々と結婚してしまっていて、老夫婦二人が取り残されてしまったんです。そこへいきなり娘夫婦と孫三人が転がりこんでまいりまして、まったく寂しさを忘れるような、寂しさを感じる暇もないといいますか、ただ多忙というだけじゃなくて、精神的に非常に若返ったといえますか、明るくなったという感じがしますね。

初めて孫ができたときは、自分の血のつながった者を抱いたという感動がたしかにありましたけれども、一緒に暮らしてみると、やっぱり、若いエネルギーに触れるといいますか、それがすごく大きいように思いますね。

ですから、祖父母の精神衛生としては、孫と同居する、あるいは近くにいることはすごくいいことだと思います。これから高齢化社会で老人が増えてくるそうですが、やっぱり孫をもっている老人と、もたない老人とでは、ずいぶん違うんじゃないかなという気がしますね。

加藤 そうお思になりますか。

並木 私の場合は、最初に男の孫が生まれましたが、ともかく、それはもうかわいいの一点張りでしたね。とても孫をしつけないことはできないから、息子夫婦に、しつけのほうはおまゑたちが自分できちんとやってくれと宣言しました。私は孫を猫かわいがりにかわいがるからね。



清水美知子氏



加藤恭子氏

子どもたちが結婚したときは、寂しくなったというより、やっと二人になれたという気分の方が強かったですね。それまで、子どもは二人でしただけでも、主として家内の関係で親類の子が東京の学校に入学するとか何かで、誰か家に同居しておりました。そういうことで、「やっと二人になれたね」という、ほっとした感じのほうが強かったことをおぼえております。

最初の孫のときは、私の家のすぐ近くの病院で産みまして、嫁と孫が三か月、私の家におりました。ですから、入浴はほとんど、私の家内がやっておりました。二番目になりますとやや慣れましたが、それでも一か月ほどおりました。三番目は、息子たちが住んでいるところの近くの病院に入って、生まれました。そういうことで、すこしずつ、いろんな意味の距離がでてきたような気がしております。

湯沢 私の住まいは二世帯住宅としてつくつてあるものですから、同居してもかまわないという

つもりだったのです。しかし長女は、結婚して初め一年ほどは普通のマンション暮らしをしていました。けれども、子供ができると働けなくなる、夫一人ではやっぱり苦しいというので、当然のように転がりこんできて、孫が生まれたわけです。

私が第一に感じたのは、下の娘の誕生以来、二十六、七年ぶりで「赤ちゃんがやってきた」という感じだったですね。赤ちゃんというのは、ともかくふわふわしていて、抱くと独特の感じがありますね。それは男にとっても、やはり楽しいことです。男は責任がないからそういうことを言いやすいのかもしれませんが、とにかく赤ちゃんが戻ってきた生活が始まったんだというのが第一の印象です。

それからもう一つは、孫ができることによって、人間としての責任を果たせたんじゃないか。大げさにいいますと、人類の存続する責任を果たしたんだという、そんな気持ちにもなりました。

ところで、二世帯住宅というのは半別居で、生活の道具などを別にして、食事、生計のすべてを別の暮らしとしてスタートするはずだったんです。ところが、だんだん孫が大きくなるにしたがつて、歩きまわるようになります。それにつれて、どんどん垣根が破れていきまして、半別居だと言えなくなってきた。これは非常な誤算だったんですけれども、ともかく、初めに予定したようにはいかないところがかなり出て来ましたね。

福島 よく「孫が来るのは二度喜びがある」と言いますよね。来たときにすごくうれしくて、帰っていったときにも、ほっとしてまたうれしいという。孫の相手をするのは、それだけ大変だというでもあります。

▼祖父母と孫の伝統と文化

加藤 ここまでは個人的な感想をお伺いいたしました。が、ちょっと視点を変えまして、たとえば日本の文学作品とか、その他、書かれたもののなかで、祖父母と孫の関係がどう描かれてきたかを見てみたいと思います。

たとえば、向田邦子さんの『金欄緞子』という作品。祖父母と同居の、当時の東京の生活を描いたものですが、そのなかで、おばあさまのことをこう書いておられます。

「女としてはあまり幸せではなかった七十四年の人生。憎まれ口は叩いたが、愚痴はこぼさず、あの食料難の時代に、居候の私に食べものなことであの一度も嫌な思いをさせなかった祖母が、冬の陽だまりの中で拾った布団を道端に敷き、その上にチョコンと坐って孫と遊んでいる姿が見えるような気がするのである。(中略) そしていま七十歳の母は、目の底に浮かぶ祖母の姿そっくりになってきている」

このように、祖母の姿を母親に重ねあわせて、そしてやがては、もしかすると、それがご自分の姿になっていくというようにとらえていらつしやるのではないかと思います。

そして、おじいさまについては、あまり日常的に接触がなかったにもかかわらず、『檜の軍艦』の中でこう書いておられます。

「祖父は不遇のうちに昭和二十八年七十歳で亡くなったが、この頃になって、私の身のまわりの規準というか目安は、この祖父にあるのではないかと思うようになった」



ほかの文学作品などのなかで、日本の祖父母と孫の関係がどうとらえられているのかについては、いかがでしょうか。

湯沢 日本のものはよく知らないのですが、外国とくにヨーロッパには、かなり多く児童文学にあらわれていますね。

たとえば、戦前一世を風靡したバーネットの『小公子』。裏町育ちの少年が祖父の伯爵に迎えられてイギリスに渡り、伯爵の心をやわらげて母とも同居できるようになる。戦後有名になったのがスイスの『ハイジ』。孫娘がガンコなおじいさんと仲良くなっていく物語。古くは、ドイツのグリム童話七八番『年とったおじいさんと孫』がありますね。年とったおじいさんが食器をよく落として割ってしまう。両親は相談してゴツゴツした木の食器を作って渡してホッとする。それを見ていた五つの坊やが木屑をきざみだす。「お父さんにあげようと思って」、それを聞いてハッとして両親は木の食器をやめにする、といったお話です。また長編ですが、ネムツオヴァの『おばあさん』もいいですね。チェコではもともと愛読されている本だそうですよ。

加藤 祖父母と孫の関係を歴史的に見ると、いかがでしょうか。

福島 今とは違って、心理的な距離はすごく遠かったんじゃないでしょうかね。昔の祖父母というのは、年齢的には今よりも若いかもしれませんが、すごく世代間の距離が遠くて、神棚に上げるほどではないですけども、すこし距離があると思うんですね。

日本の近代文学の中では、たとえば三島由紀夫のおばあさんとか、志賀直哉のおじいさんとか、いろんな特殊な事例があります。けれども、よくあるのは、子どもが青年期を迎えて父親との間にエディプス的な葛藤を体験するというようなときに、同一視の対象として、あるいは尊敬の対象と



して、祖父母をモデルにするとか目標にするとかということが、けっこう多かったような気がしますね。

逆に今は、高年出産が多くなったこともあって祖父母と孫の年齢は昔より離れているかもしれないけれども、心理的な距離はもっと近くなっている。昔の祖父母はあがめたり、敬う対象だったのが、今はむしろアタッチメントや、愛情を交流するというような感じが強くなってきたという気がしますね。

並木 私の経験では、おじいさんと一緒に食事をした記憶がありませんね。

加藤 同居でいらつしやいましたか。

並木 いや、別居なんです。親戚には、それこそ実によく遊びに行つたものです。それはおそらく祖父の考えだったと思うんですけども、孫たちは将来とも仲よくしていかなきゃいけないんだから、なるべく集めて一緒に食事を食べさせようとしむけておりました。私にとつてはいとこたちになるわけですが、それが今とは比べものにならないくらい数が多かった。私にはいとこが六十人ほどいました。私のきょうだいは八人でしたが、親父のきょうだいが十三人いたんですから。それに、おふくろのほうにもいますから、合わせますと、六十一人だつたと思うんです。

で、父方の家へ行きますと、テーブルに全部すわつて食事するんですが、私からいえば伯父が家長のようなどにすわつておりまして、その周囲に二十人くらいすわつてました。姉やと呼んでいた人がごはんをもつてくれるんですが、二十人が「おかわり」「おかわり」と言つたら、とつても対応できるもんじゃない。それなのに小さい頃はいたずらが好きですから、姉やが自分の食事をしようとするときに「おかわり」と言つて、茶碗を出すんです。そういういじわるをやつた記憶も

ある食事どきでしたが、おじいさんは全然別の部屋で食事をしていましたね。父方、母方両方とも、そうでしたね。

加藤 おばあさまも、そうでいらしたのですか。

並木 いや、おばあさんは一緒に食べました。おじいさんだけは別の部屋で、そこへお膳を持っていった。

加藤 それは、どうしてでございましょうか。

並木 どうしてかわかりませんが、小さいときからの記憶ではそうです。

湯沢 それは何県のことですか。

並木 富山です。おばあさんはともかく、おじいさんは家族のなかでも別格でしたね。これは多少、職業との関係があつたのかもしれませんが。私が記憶しているころの祖父は、母方のほうは県の銀行の支配人とか重役というようなポストにいました。父方のほうは市会議員か、あるいは議長をやっていたのかもしれませんが。そういう地位にあつたことが多少は関係あるかもしれませんが、ともかく別の部屋で食べてました。二十人とか十数人が一緒に食べていても、そこにじいさんがきたという記憶はありませんね。

加藤 その他大勢にはお入りにならないわけですね。

並木 入ってないですね。

福島 おばあさんはどうしてらっしゃいましたか。

並木 ばあさんは、みんなと一緒にやりましたね。

清水 伝統や文化の伝承とおじいさん、おばあさんとの関係で、まず頭に浮かぶのは昔話ですね。



私自身も子どものころ、『桃太郎』や『かちかち山』など昔話のほとんどは祖母から聞かせてもらいました。今のように『日本昔ばなし』なんてアニメもありませんでしたから。そして、思えば昔話に出てくるのはたいいてい、おじいさん、おばあさんと孫なんですね。「昔、昔、あるところに、おじいさんとおばあさんがいました……」というように、昔話の世界には、お父さんやお母さんはあまり出てこなくて、おじいさんやおばあさんが重要な登場人物となっている。おじいさん、おばあさん、孫というコミュニケーションが、昔話を成立させているように思いますね。お父さん、お母さんから子どもへというのではなくて、おじいさん、おばあさんから孫へという情報の伝達ルートが、とても重要であつたのではないかと感じています。

▼祖父母が孫に伝えるもの

並木 昔話が祖父母から孫に伝えられたということは、とくに農村では、はつきりそうでしょう。要するに、今の言葉でいえば、若夫婦のほうは仕事にいつてますからね。ですから、おばあさんは家のなかの食事だとか、それから孫の面倒をみるとか、そういう仕事が多かつたと思います。その関係のなかで、いろいろなことを孫に伝えたいと思いますよ。よく、ばあちゃん子は気配りがいいとか、しっかりした子に育つかいわれたですね。おばあさんが育てれば全部そうなるとは限らないけれど、いいおばあさんに育てられた子は、そうなたんじやないでしょうか。

湯沢 ただ、祖父母のことは、はつきりした記憶が残らないということもありますね。親と子のばあい、年齢差はだいたい二十から四十ぐらいでしょうが、祖父母と孫となると、人によつてもの



すごく差がある。いとこどうしでも、祖父母の長子の子に生まれたか末子の子に生まれたかによって、祖父母との年齢差が二十歳ぐらい違ってしまうわけですね。若いおじいさん、おばあさんに会っているか、年とってから会っているかによって、相当にイメージが違うと思いますよ。比較的後のほうに生まれた子のばあい、おじいさん、おばあさんがどんなに面倒をみてくれても、五つ、六つぐらいまでの記憶は残らないので、祖父母の印象が薄いということもありますね。それに、祖父母との関係は、同居・別居の違いもあるし、親との関係より人によって差が大きいのではないでしょうか。

私自身のことといえば、母方の祖母とかかなりの期間、同居したことがあるんです。私の家は父が入り婿だったものですから、父方の祖父は山梨県にいて、一度しか会ったことがない。母方のほうには祖母が亡くなるまで同居しておりましたが、祖父は時々来るといふ変則的な暮らしをしていました。どうしてそうだったかといいますと、大正十二年のときに、祖母が五十そこそこで脳卒中を起こして半身不随になり、寝たきり同然の暮らしになったのです。その看病に手がかかるだろうということで、私の母に面倒をみるということで婿を迎えて、祖父のほうは長男と暮らしていたというわけです。

それで私と祖父母との年齢差がどれぐらいだったかと調べなおしてみましたら、おじいさんとは六十七歳、おばあさんとは六十一歳違いでした。六十七歳違っておじいさんは、実に文久三年（一八六三）生まれなんですね。私に直接話しかけるなんてことはほとんどありませんでしたけれども、おとなどうしの話を思い出してみると、「何両だ」「何町だ」という言いかたを、戦後になってもしていました。けっして「何円だ」とは言わないんですね。学歴はなかったですけども、明治二十

一年に栃木県から東京へ出てきまして、炭問屋として非常に成功をおさめたんです。そのあたりは、時代も時代だったということでしょうね。

炭問屋を開いたのは、新宿駅の東口でした。都庁のある西口は当時は何もないところで、東口は炭問屋のまちだったんです。甲州街道と中央線のとばくちですから、多摩や山梨方面からの炭の集積場に適していたわけですね。で、炭問屋が九軒ありまして、そのうちの一軒は紀伊国屋書店になっている紀伊国屋さんで、やはり同郷の親類です。炭問屋をやめて書店をやることについては親戚の反対が強かったそうですが、炭も本も原料は同じ木材だというような返答をして押しきったと聞かれています。

私のじいさんのほうは、そうした炭問屋の一軒をやって、営業的にはかなり成功し、子孫は大学に進学した者が多かったんですが、そのおじいさん以上に商売がうまい人はいなかった。みんな、おじいさんの遺産で食べているようなものだ、おじいさんは偉かったと、みんなでいうんですけれども、しっかりしていたのは、実は連れあいのおばあさんで、いつも帳簿をつけていた姿を思い出します。おじいさんと違って、ちゃんと小学校に通ったし、優等生だったと自分でいっていましたね。

このおばあさんとはかなり一緒にいましたから、日常的な話もいろいろあったはずですが、私の記憶としては、『宮本武蔵』の本を読んであげたということが印象として強く残っています。というのは、軽い子宮癌を患いまして、癌研病院に入院していたとき、ラジオで吉川英治の『宮本武蔵』の朗読を徳川夢声という声優がやっていました。おばあさんはそれが非常に好きだったんですね。私が時々見舞いに行きますと、小学校三、四年年のころだったと思うんですが、読め

るかというんで、「そのくらい読める」と言いましたら、何ページから何ページまで読んでくれるかが仕事でした。行くたびに読まされたという記憶がよく残ってますし、それが今では、おばあさんとの接点として印象的です。そういう接触のなかで、文学趣味をおばあさんから受け継いだのかもしれませんが。そのほかにも日常的なことがいろいろあつたはずですけども、記憶としては、あまりはつきりしていません。さきほども申しましたように個人差のあることでしようが、祖母から受け継いだことの多くは、記憶としては残っていないのではないのでしょうか。

▼変化してきた祖父母との関係

加藤 個人差はいろいろございますが、孫と祖父母との関係も、時代によって変化していると思います。

私は一九五〇年代から七〇年代にかけてアメリカに住んでおりました。その時代のアメリカの祖父母の存在というのは、一般的には、伝統のなかに位置づけられていたように思います。たとえばクリスマスと感謝祭には、祖父母のところに集まってみんなで祝うというように、祖父母は一族の象徴みたいなものでした。ただ日常生活での当時のアメリカは、核家族がしつかりしておりましたから、祖父母が子育てに口を出されては困る、敬して遠ざかるという面もありました。

ところが先月、アメリカへ行きまして、祖父母のことを友人たちに聞きましたところ、非常に変わってきていることに気がつきました。それは、まず、核家族が崩壊しているために、今まで祖母の出番がなかったところに、祖父母の出番が出てきたということですね。



アメリカ政府の統計によると、一九九一年には、八家族に一家族の割合で片親になっています。この数は、一九七二年の統計の倍です。女性と男性との割合をみますと、女性が片親になるほうが男性の五倍も多い。それから、一九六〇年には未婚の母から生まれた子どもは全新生児の五%でしたが、一九八九年には二七%が未婚の母から生まれております。

また、カーネギー・コーポレーションが三年がかりでまとめた統計によりますと、三歳以下の乳幼児二二〇万人のうち、未婚の母をもつのは、一九六〇年には二〇人に一人だったのに、一九八八年にはなんと四人に一人となっております。

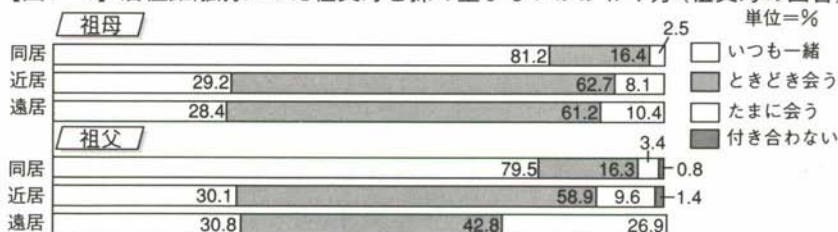
未婚の母、あるいは離婚などで、子どもを引き取るのは女性のほうが多いのですから、そのばあいに助けを求めるのは母親の母親、つまり祖母になるわけですね。核家族の崩壊によって、祖母もしくは祖父の出番がそういう意味で出てきたことを、先月アメリカに行ったときに、多くの方からうかがいました。

私の友だちのなかにも、娘が未婚の母になってしまったために、孫を引き取って育てたという女性は何人もありました。大きな変化がアメリカの祖父母と孫との関係において起こっているということを、実感して帰ってきたところでございます。

清水先生の日本における祖父母と孫関係の調査を拝見させていただきましたが、とても興味ぶかい内容でございます。清水先生からご説明いただきたいと思っております。

清水 この調査(図表参照)は、昨年、兵庫県家庭問題研究所が県の委託を受けて行なったものです。調査は二種類行いまして、一つは幼稚園・保育所に通っている子どもをもつ親に対してのアンケートです。それからもう一つは、孫をもっている五十代から六十代が中心の婦人会の会員と、

【図1-1】居住距離別にみた祖父母と孫の望ましいかわり方(祖父母の回答)



その配偶者の方を対象に、やはりアンケート調査を行いました。

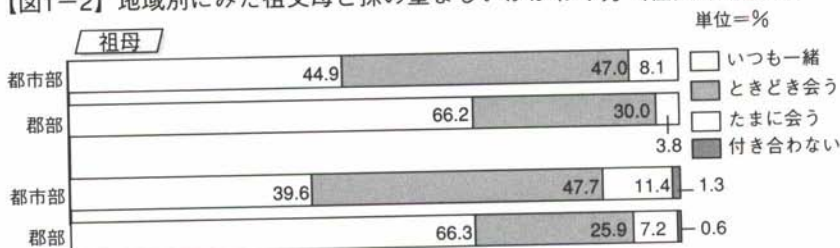
祖父母と孫の関係を申しまして、孫の年齢によってかなりの違いがあります。たとえばおじいちゃんやおばちゃんと孫の関係は、思春期の孫のばあいと乳幼児の孫のばあいとは、かわり方やかかわる頻度などが、かなり変わってきます。そこで今回は、幼稚園から小学校低学年という、どちらかといえば、年齢の低い孫と祖父母のかかわりを中心に調査を行いました。

どういうことを聞いたか、おもな点だけを箇条書き風にまとめていきますと、①祖父母と孫がどのくらい交流をもっているか、②祖父母がどのくらい孫の子育てにかかわっているか、③親は祖父母に対して、子育てにかかわってほしいと思っているのか、④いっぽう祖父母のほうはどの程度、孫の子育てにかかわりたいと思っているのか、⑤祖父母と孫はどのようにかかわるのが望ましいかなどといったことです。いずれの質問においても、祖父と祖母の違い、父方祖父母と母方祖父母の違い、現在の住まい方による違い、都市部と郡部の違いなどに注目しました。

加藤 その結果として、もしろい、意外だったというような点は、どんなところでしょうか。

清水 おもしろかった点は、いくつかありますが、ひとつ例をあげると、祖父母と孫のかかわりをめぐる意識といっても、地域による差が大きいという点ですね。祖父母と孫の望ましいかわり方として、親と祖父母の双方に「同居して交流をもつのがいいのか」「別居して交流をもつのがいいのか」についてたずねてみたのですが、結果を都市部と郡部に分けてながめてみたところ、「同居がいい」といっているのは唯ひとつ、郡部の祖父・祖母だけでした。親世代のほうは都市部も郡部ですが、祖父母世代でも都市部では、孫とは別居してときどき会ったり食事をしたりするのがいいと考えている人たちが多いです。祖父母と孫との関係について論じられるとき、三世代が同

【図1-2】地域別にみた祖父母と孫の望ましいかわり方（祖父母の回答）



居する家族像が理想のモデルであるように描かれることが少なくないのですが、都市部に住む祖母の過半数が、別居による交流を志向していたことは、興味ぶかい結果ではないかとおもいます。

▼母方祖母と父方祖母の違いは？

福島 清水先生の調査を見せていただいて、とてもおもしろく思ったのは、母方祖母と父方祖母の違いが非常にくつきり出ていることです。母方祖母のほうが孫と密着していて、非常に親しみがある。父方祖母は、ちょっと距離があるという感じがございますね。(図2参照)

清水 調査対象の親の九〇%以上が母親という回答でして、そういったことから、どうしても自分の親のほうに評価が高いということもあると思うんですが、やはり母方祖母の特に祖母に対する期待が高くて、困ったときの相談相手とか、ちょっと買い物に出かけるときに子どもを預かってほしいとか、母方祖母に対する期待はかなり高いという結果も出ております。

加藤 意見が合わないのは誰と誰かという問いでは、お嫁さんとお姑さんが一番あわないということでございますね、調査結果を拝見いたしますと。(図3参照)

清水 そうなんです。

福島 日本の「家」は、戦前までは父系できて、息子と同居して嫁を迎え、子どもを産むというシステムだったけど、今はむしろ、娘夫婦と一緒に暮らしたほうがしっくりいくんじゃないかというふうに、この調査を見て思いましたね。要するに母方祖母と孫との関係のほうがしっくりいくようです。僕の家も、そうなんですけれども。(笑)

【図2-1】親が祖父母に期待すること・ベスト5

単位＝%

母方祖父に対して		母方祖母に対して	
1位	60.4 子どもの遊び相手	1位	53.9 夫婦で外出する時、子どもを預かる
2位	30.1 夫婦で外出する時、子どもを預かる	2位	53.9 子どもの遊び相手
3位	23.0 おもちゃや小遣いをくれる	3位	48.2 子どもの体調が悪い時、相談にのる
4位	18.1 子どものしつけ	4位	37.4 買物に出かける間の子どもの世話
5位	16.1 買物に出かける間の子どもの世話	5位	35.7 子育てのやり方についての助言

清水 たとえば、父方の祖父母と同居、母方の祖父母と同居といった住まい方別に「望ましいと思う祖父母とのかかわりかた」を調べましたところ、「いつも一緒にいい」と言う人は、やはり母方祖父母と同居している人に多いですね。父方祖父母と同居している人に比べますと、二〇％くらい高くなっています。自分の親と同居している人たちには嫁と姑の関係がありませんし、いろいろなことを気がねなく頼ったり頼られたりできるということかな、と思いました。

加藤 意見の違いは、母方の祖父母と婿の間にも、あまりないわけですね。

清水 あまりないようです。アメリカのばあいは、『奥さまは魔女』というテレビ番組にみられるように、娘の母親と婿との関係がよくないことがありますが、この調査からは、そういったことがあまり出てこなかったですね。

それから、祖父母と別居しているばあいは、お嫁さんよりも娘と意見が合わないという人が多かったです。別居のばあいは、息子の嫁よりも自分の娘とのかかわりが多いということが背景にあると思うんですけれどもね。

福島 もう一つおもしろかった点は、これだけ情報化社会になって教育程度も上がり、育児雑誌などがたくさん出ているけれども、子どもの体調の悪いときなどに相談するのは、やはり母方祖母。ベビーシッターがわりとか、子育てについて助言を求めるのは、父方祖母に比較すると、母方のほうが多いですね。いざというときにすぐるのは、やっぱり母親かなという感じがしますね。

清水 母方祖母に対するそういった期待は高いし、現実にも母方祖母のかかわりが大きいのです。ただし全体的に見ますと、困ったときは助けてほしいけれども、それ以外では口出しはしてほしくない、よぶんなことは言うってほしくない、という気持ちが強いようです。

【図2-2】親が祖父母に期待すること・ベスト5

単位＝％

父方祖父に対して		父方祖母に対して	
1位	58.8 子どもの遊び相手	1位	49.3 夫婦で外出する時、子どもを預かる
2位	29.5 夫婦で外出する時、子どもを預かる	2位	48.5 子どもの遊び相手
3位	22.0 おもちゃや小遣いをくれる	3位	28.9 買物に出かける間の子どもの世話
4位	14.8 子どものしつけ	4位	28.7 子どもの体調が悪い時、相談にのる
5位	14.2 買物に出かける間の子どもの世話	5位	21.1 子どものしつけ

そのほか、あまり物を与えたりはしてほしくない。そのかわり孫と遊んでほしい。そういった面も調査結果に出ています。とりわけ、遊び相手になってほしいという期待については、祖母に対してよりも祖父に対してのほうがかなり高いという結果が出ておりました。(図2参照)

加藤 それはどうしてでございましょうね、祖父のほうに高いというのは。

清水 期待と現実の両方について聞いてみましたところ、現実はやはり祖母のほうがよく遊んでくれています。おじいちゃんに対しては、たとえば子どもを預かってくれと言っても無理であろう。期待しても無理だから、そういった面の期待値はあまり高くない。だから祖父に対する期待としては、もっぱら遊び相手になってほしいということになるのではないのでしょうか。

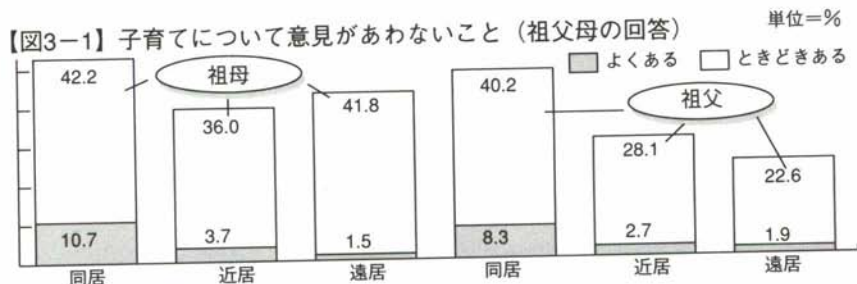
湯沢 お孫さんが男の子であるか女の子であるかによる違いということでは、どんな調査結果だったのですか。

清水 いちおうそれも調べてみたのですが、今回の調査のばあい、孫の性別によって、特に有意な差はございませんでした。

湯沢 八年ほど前に、この地域社会研究所の委託研究として、私どもの大学で神奈川県の大井町

▼孫にとっての祖父母

という小さな町で調査をしたことがあるんです。そのときは、二つの小学校の四、五、六年生に、祖父母について聞いてみました。つまり孫の側が、おじいさん、おばあさんをどう思っているかということですね。その結果をまとめると、こういうことでした。



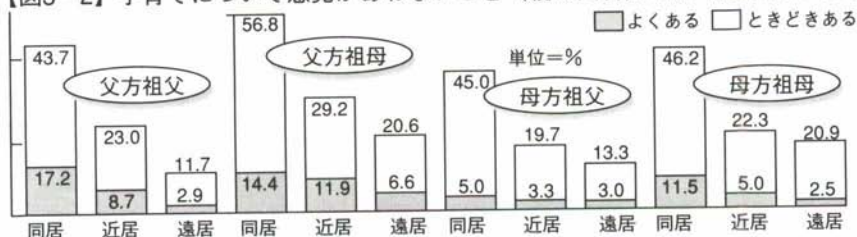
同居している孫でも、別居している孫でも、共通しているのは、ともかくおばあさんに対して親近感を強くもっているということで、それも男の子よりも女の子のほうがより強く親近感をもっておりました。女の子は特におばあさんに親近感を強くもっていて、積極的に接触したがついている。しかし、男の子は、やっぱりおじいさんと何かしたいと言うんです。では、おじいさんと何を行動するかというと、一緒にどこかに遊びに行くとか、祭に連れてってもらうとかということでした。こういうように祖父母と一緒に何かしたいというのは、孫が生まれる年代になっても、まだまだ肉体的に元気な人が多くなったということもあるでしょうね。昔は孫ができるころには肉体的にはそうとうくたびれていて、おじいさん、おばあさんというのと老齢者というのがイコールだった。ところが今は、孫ができて、おじいさん、おばあさんになったけれど、体はまだ若くて健康だという人が多い。

ことに農村ですと、五十代ですよね、おじいさん、おばあさんになったといつても。そうすると、六十ちよつとぐらいまでは、いろいろスポーツの相手もできるといぐらいの健康さがあるんですね。

同居と別居の違いで見ると、同居者のほうが祖父母への愛着は強いです。三世代同居を肯定している。別居しているほうは孫は関心が弱いです。別居していると、比較ですが相互に相手のことがよくわかっていないというのが、私どもの調査の結論でした。

清水 今回の私どもの調査は、対象が親と祖父母であったことと、孫の年齢が四、五歳ということで、あまり性別の差が出てこなかったんじゃないかと思っています。孫のほうから調査をしましたら、おそらく、おっしゃったような性別による愛着の違いが出てくるのではないのでしょうか。

【図3-2】子育てについて意見があわないこと（親の回答）*祖母・祖父とのあいだで



▼孫の年齢による変化は？

福島 性別による違いは、思春期ぐらいからはつきり出てくるでしょうが、幼児期にはあまり出ないんじゃないでしょうか。

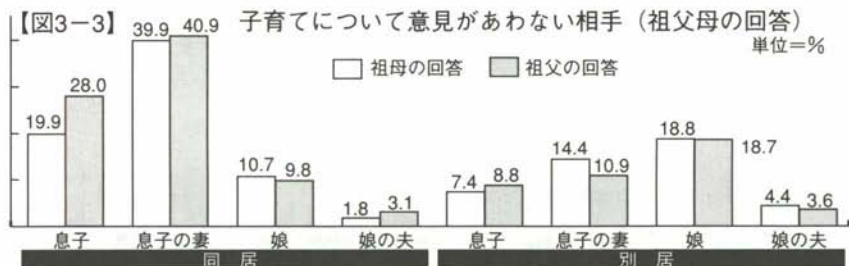
清水先生の調査対象は、親については幼児期の子をもつ親ということですが、祖父母についても一定の年齢の孫をもつ人ということだったのですか？

清水 いえ、祖父母世代の調査では、孫の年齢はまちまちですね。なかには、二十歳以上の孫をもつ人もいました。祖父母の年齢も、最高が八十六歳、いちばん若い人で四十三歳でした。

そういう年齢差がありますうえに、孫といっても、複数おもちです。全部の孫に対して調査することは難しいので、孫とのかかわりを聞くときには、いちばん接触が多いお孫さんを一人選んでもらって、その孫との交流について聞いたわけです。祖父母側の調査にある「同居」「近居」「遠居」というのは、その孫との距離をさしております。

ただし、複数いる孫のなかでかわりが多いのは、やはり年齢が小さい孫なんです。ですから、結果としては、幼児期の孫との関係を聞いたケースがいちばん多かったですね。

福島 赤ちゃんのときは受動的ですから、幼児期がいちばん接触が多いと思いますね。中学校に入るところになって、だんだん自我ができてくると、すこしずつ、親から離れていくのと同じように、祖父母からも離れていく。そして、思春期になると、祖父母と疎遠のまま成長するばあいもあるし、新たな関係ができることもある。たとえば、親とぶつかって何か問題が生じると、おじいさん、お



ばあさんがある役割を果たすようになることも、けっこう臨床例ではありませんね。統計などの数には、あまり出てこないでしょうけれど。

清水 今回の調査では、たとえば祖父母と孫が同居しているばあい、「夕飯を一緒に食べるか」「テレビを一緒に見るか」「一緒に風呂に入るか」「一緒に寝るか」と四つを聞いてみました。

並木 一緒に寝るといのは、一緒に布団でという意味ですか？ あるいは同じ部屋で？

清水 同じ部屋に寝るとい意味です。この四つの問いについて年齢をコントロールしますと、七歳から九歳と、十歳から十二歳までにひとつの転換点があつて、当然のことかもしれませんが、一緒にお風呂に入るとか、一緒に寝るとかというのは減りますね。一緒に夕飯を食べるといのも、そのあたりから急に減っていました。(図4参照)

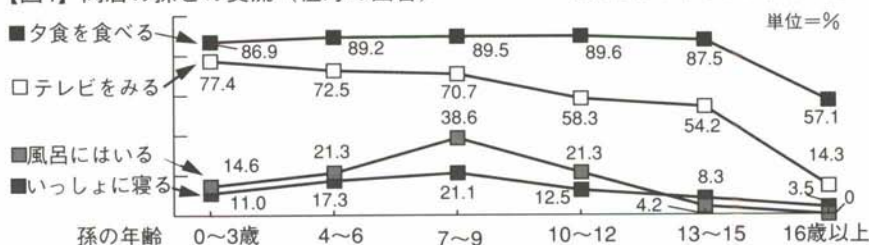
▼精神分析学からみた祖父母と孫

加藤 福島先生のご専門の精神医学では、祖父母と孫の関係を、どのように見ておられるのですか？

福島 僕は精神分析的な立場から、すこし伝統的な考えかたをしています。子どもを育てていくうえで、いちばん大事なのは、やはり母親だと思っています。さきほど、おばあさんっ子は気配りがいいというお話もございましたが、僕は母親が専業主婦で、たとえば清水先生がおっしゃる転換点の七歳、九歳ぐらいまでは母親が育てるのがベストじゃないかと思うのですね。しかし、今日の座談会のように、祖父母と孫との関係が論じられるようになったというのは、母親だけでは育てられ

【図4】同居の孫との交流（祖母の回答）

* ほぼ毎日いっしょにすること



ない状況が出てきていることが大きいと思う。

その一つの背景は、女性がキャリア志向になって外に働きに行くことが多くなったことでしょう。そうすると、子どもは保育所のようなところへ預けるか、おばあちゃんに面倒をみてもらうというふうになっていく。それから核家族指回からの揺り戻しにくわえて、住宅事情もあって二世帯住宅が増えてきているとか、高齢化社会で老人が非常に若く、元氣になってきて、おじいさん、おばあさんの世代になってもまだエネルギーがあまっているというようなことがあって、今の状況が出てきているんじゃないかという気がします。こういう状況は、たとえば女性の社会進出にしてもそれ自体はいいことです。それから、進めていくべきでしょう。そうすると、やはり祖母の出番が出てくると思うんですね。僕の立場から言うと、ベストではないけれども、ベターではある。つまり、母親が果たしえないところを、おばあさん、あるいはおじいさんが補ってあげていく。ベストではないけれども、そういうものがない状態よりも、ベターであると思いますね。

また、そういうことによって、逆におじいさん、おばあさんのほうにも生きがいみたいなものが生じてきたり、若返ったりすることがあるので、これは社会的に見て非常に好ましい状況だろうと思っています。

加藤 母親が育てるのがベストだとして、かえって精神的な傷を子どもに負わせるというか、祖母の存在がマイナスに働いたというような例もあるのでしょうか。

福島 それはいくつかのサンプルがあります。一つは、依存の対象が複数になることで、だんだん使い分けを覚える。甘えかたを使い分けるということで、トータルな人間的な関係を体験しないで育ってしまうということがありうるかもしれませんね。

それからもう一つは、さきほども話に出ておりましたが、おじいさん、おばあさんはどうしても親のように厳しくしつけることができにくいということで、悪い意味で甘やかしてしまう。そのため、子どもの超自我の形成が弱くなる。思春期以後になると、挫折に対して抵抗力が弱いとか、欲求不満のトランスが低いということが起こってくる可能性もありますね。最近の非行少年などに、そういうケースが増えているように思います。

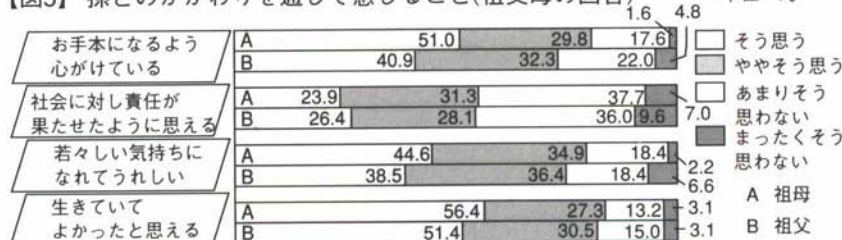
ただし、それはおばあさんっ子だったからそうなのか、それともお母さんが十分にマザリングというか、アタツチメント（接触）を与えてあげなかったからそうなのか、そのへんはわかりません。並木 私は孫と近居ですから、当然なのかもしれませんが、親子の關係に比べて、孫とばあさんは緊張關係はあんまりありませんね。そういう意味では、傷つけあうことも少ないし、逆に本当の意味で鍛えるということも少ないような気がしますね。けれど、さつきも言いましたように、孫が小さいうちは本当にかわいいですから、おもちゃも買ってやりたいし、どうしても甘やかしますよ。

湯沢 じいさん、ばあさんと孫というのは、並木先生がおっしゃったように緊張が少ない。ブッシュマンの言葉を使うと、ジョーキング・リレーションシップ、「冗談關係」なんですね。

ブッシュマンというのは、南アフリカのカラハリ砂漠に住んでいる民族ですが、そこでは親子は避けなければいけない「忌避關係」だということです。親子關係は緊張しているから、ともかくまじめな顔をして、慎重ぶかい態度をとらなければいけない。いわんや性に関する話なんか、一言もしてはいけません。だから、性教育を親はしない。するのは、おじいさん、おばあさんの仕事です。おじいさん、おばあさんとは冗談が言える關係で、これは同性のきょうだいやいとこの關係もそうなのですが、そこでは自由勝手に、お互いに悪口をいくら言ってもいいし、持ち物を断りなく使つて

【図5】孫とのかかわりを通じて感じること(祖父母の回答)

単位=%



かまわないし、いたずらをしても怒られない。猥談を言ってもいい。だから性教育も気楽にできる関係になるんですね。

祖父母と孫の関係は、日本でも基本的には自由で気楽な関係だと思っんですね。

福島 思春期に親とぶつかって問題が生じると、祖父母がある役割を果たすことがあるというのも、そうだからかもしれません。

並木 清水先生の調査結果にも、そういったことが表れていますね。

清水 そうなんです。親はやっぱ、「早く食べなさい」とか、「何やってるの、急いで」というふうに子どもをせかしますね。だけど、おじいちゃん、おばあちゃんは、ちよつとゆとりがあるし、親のように責任がない。責任がないから気楽で、無条件にかわいいところもあって、子どもがゆつくりしていても、そのまま見ていてあげることができる。これは親のほうも評価している点です。(図6参照)

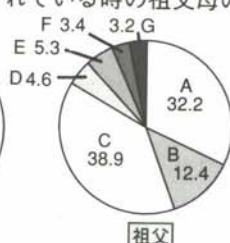
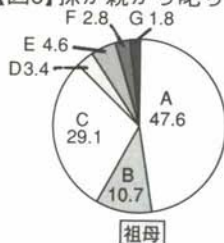
そういうことで、おじいちゃん、おばあちゃんが子育てにかかわるばあい、親と同じようなかわりかたをしたのでは、子どもは息苦しくなるばかりじゃないかと思ひます。おじいちゃん、おばあちゃんには、やはり親とは別の役割があるのでしょうか。

▼祖父母と親の関係は？

並木 しかし、親の考えかたというものも尊重してやらなければいけない。私は、おもちゃを買うときには、いちおう、私の子どもたち、つまり親の許可が出れば買ってやるよということにはし

【図6】孫が親から叱られている時の祖父母の対応

単位＝%



- A あとから慰める
- B 助け船を出す
- C いっさい口を出さない
- D 一緒になって叱る
- E 親の方をいさめる
- F その他
- G 不明

ましたけどね。

福島 親の意見を聞いてということですね。

並木 ええ。やっぱり私の子どもにしてみれば、こういう育てかたをしたいという考えがあるでしょうからね。

福島 なにしろ教育権は親にあるわけでしょうからね。

並木 ですから、こういうおもちゃを買ってやってもいいのかな、悪いのかなというところは、じいさんとしては買ってやりたいんだけど、今そんな高価な物を買っちゃまずいということなことがあれば、それはやめる。そういう気遣いの必要はあると思いますね。

おっしゃったように、教育権はやっぱり父母にあるわけでしょうからね。

湯沢 要するに子どもはおじいさん、おばあさんの子ではなくて、息子なり娘なりの子なんだからということ、はつきりしておかなくてはいけませんね。

たとえば私のところでも、同居している三つの子が、うちの冷蔵庫に好きなアイスクリームがあるのを知ってますから、ときどき来て、「アイスクリームを食べたい」と言います。「まだ食事終わってないでしょう」とか言って、よく私の妻、つまりおばあちゃんともめているわけですが、どうしても食べたいというときには、「それじゃ電話かけて、いいと言ったらあげるから」というわけです。

電話の内線「1」を押すと親が出ますから、自分で押して聞かせています。それで「だめ」と言われると「だめ」、「いい」と言われたら「あげる」といったような使い分けをしているんです。

湯沢 孫のほうでも、祖父母と親をうまく使い分けます。三つになった上の孫が年のわりにはおしゃまで、口もよく回る子だと思っんですけれども、これが非常によく使い分けているんです。

自分たちは三階に住んでいます。そこで何かいたずらをして怒られますと、泣きながら我々のところに避難してきます。じいちゃんとはあちゃんに同情をかいまして、「まあまあ……」と言って慰めてもらうことを期待して来るんです。

ところが、悪いことをすると、我々も怒ります。イエローカードとレッドカードという制度にして、イエローカードを三枚ためたら追い出すことにしようと思っんですが、今はまだカードを欲しがる段階でして、「もつとくれ、もつとくれ」と言いますから、うまくいかない。今は悪いことをすると、ベランダに出してしまうことにしています。それをやられると、今度は私の親、つまりひいおばあちゃん。九十なんですけれども、そこへ行くんですね。

ひいおばあちゃんとの付き合いかたも、なかなかおもしろいですね。役割がはっきり決まっています。夕ごはんが済んだ後、何種類かの薬の袋を並べるのがひ孫の仕事です。三つになる前から、自分のほうがかけっこしたって速いし、動き回るのも自分のほうが達者だとわかったらしくて、優越感をもったらしいんですね。それで助けてやろうというわけか、九十のばあちゃんは寝ていることが多いものですから、非常にいたわります。いろんなことをカバーします。布団をもってきてやつたりとか、いろんなことをやるんです。

ところが、弱くてしょうがないひいおばあちゃんだと思っていたら、このあいだ、ひいおばあちゃん字が読めるということがわかったんですね。自分にできないことができるってわかって感心して、みんなに宣伝して回ってましたけれども、そうしたことから、ひいおばあちゃんが機嫌がいいときに、昔の歌などを歌い出したわけです。また、ひ孫ができたおかげで、ひいおばあちゃんは何十年ぶりかで折り紙ができるということを思い出しました。我々は折り紙というのは小さな紙に折るもんだと思っていたんですが、新聞紙や、新聞広告を使って折るんですね。大きなぶととかオルガンができるんです。我々にはできないようなことが起こってきました。

加藤 お孫さんにとっても、ひいおばあちゃんにとっても、いいことでございましたね、両方にとつて。

湯沢 そうなんですね。お互いに新しい発見で、なかなかいいですね。

それから、私のところには結婚してない次女も同居しています。私のところは全部で八人いますから、おとながたくさんいるんです。孫はそれを実に上手に使い分けます。悪くいえば、ずるくしているんですけども、片一方でいじめられたときは片方に行つて、「まあ、そのくらいは何とか……」ということを言われますとおさまるわけで、上手に使い分けています。

これは、いちばんの責任者の母親のためにもいいことではないかと思っています。一人だけでカッカ、カッカして、誰もおさめてくれる人がいない家に比べたら、非常に助かっていると思うんですね。

加藤 母親というのは、先生のお嬢さまでいらつしやいましたね。

湯沢 そうです。

加藤 福島先生と同じケースですね。

福島 日本は母系家族のほうがうまくいくようですね。

清水 今回の私のどもの調査で、孫にとって祖父母はどういういい点があるかということについて、ある母親がこういうふうに書いています。

「子どもにとって、おじいちゃん、おばあちゃんというのは、たぶん、両親には通らないわがママがすこし許されて、自分のすべてを受け入れ、甘えさせてくれる安らぎの人間関係であるようです」
また、別の一人は、こう書いています。

「子どもにとっては、父母にしかられたときなど、祖父母がいないと、ストレスを自分の中に閉じ込めるしかないのですが、祖父母がいることによって、唯一の逃げ道ができるのではないかと思います」

湯沢 先生のお孫さんが、おじいちゃんやおばあちゃんのところに逃げてくるとおっしゃったようなことは、まさにそういった意味ではないかな、と感じました。

加藤 さきほどのひいおばあちゃまの弱々しさに対して孫が手を差し延べるといように、弱い人を見せるのも必要ですね。

湯沢 おじいちゃんでもおばあちゃんでも、自分が得意なこと、好きなことは自然に、たとえば歌が好きだったら歌が出ますし、お茶が上手だという人は自然に一日置きぐらいでもお茶をいれると思うんですね。そうしますと、すくなくとも、うちの孫について見ますと、もう三つぐらいでいいろんなまねをします。何でもおとなのまねをするのが大好きですね。うちの子は男の子ですけど、調理が大好きで、人参を切らせる、大根を切らせる、それを鍋にぶち込んでワーワーやるのが

好きなんですけども、そういうまねというのは自然に出てくるので、家族が多ければ多いほど、子どもはいろいろやる事ができて、退屈しないと思うんですね。

その点、核家族で、家にいるのは母親一人だということになると、母親のほうでもやる事がなくて、そのかわりにお金を払って塾にやるんじゃないかと思うんです。子どもに対してもっといろんなことをやれば、実に物まねが上手にできるものだと思いますから、そうした相手としては、暇があるおじいさん、おばあさんがいちばんいいように思うんですけれどもね。

加藤 福島先生はどう思われますか。

福島 今まで核家族のほうに向かっていつて、アメリカなどではさらに進んで家族が解体しているわけですが、多様な人間関係、特にいろんな世代にわたる人間関係を知ることが、子どもの人間形成にとってすごく大きいと思います。湯沢先生のお話にあったように、弱い人が実はすぐれているところをもっているということに気づくとか、あるいは自分でもできることがあると体験するということがあるんですね。

特に今の孫の世代は非常に子どもの数が減っていて、きょうだいが少ない、ひとりっ子も多いという事です。ですから、ますます人間関係が単調になってしまふ。それで、しかたがないのでテレビなんかを見て時間を過ごすことが多くなっているという傾向があつて、新人類化が進んでいるわけですね。

そこに祖父母がいれば、違った人間を見ることが出来る。そこで、人間というのいろんなものがあるて捨てたもんじゃないな、というような感じがあつて、あるいはテレビよりおもしろいおじいさんがいるかもしれないというようなことで、そういう関係を社会的にも推し進めていったほう

がいいんじゃないかと思っています。

特に今の親の世代は、男は外で働いてほとんど家にいない。女性のほうもキャリア志向で職をもっている人もいますし、専業主婦でも自分の教養、友人関係、趣味などを大事にすること外に出ることが多くなり、親の機能が、もしかすると、一世代前の専業主婦よりも落ちているかもしれない。そういう状況のなかで、祖父母が登場するということは、非常に大きな意味をもっていると思います。

▼祖父母と親のギャップ

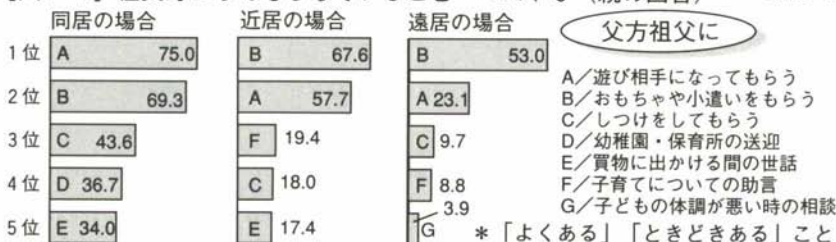
並木 清水先生の調査を拝見しておもしろいと思いましたのは、子育てへのかかわりの「親が祖父母に期待すること」ということです。「おもちゃや小遣いをくれる」というのが三位で二二％。ところが、「実際にしてもらっていること」という項では、「おもちゃ、小遣い」が父方祖父のばあいが六九パーセント。これは複数回答でしょうけれど、ずいぶん多いでしょう。近居のばあいは、それがトップにきてますね。

私は子どもたちに聞いてから買ってやるというつもりでいるんですが、あるいは息子のほうはちよつと迷惑に思っているのかもしれないね、この結果から見ますと。(図7参照)

清水 離れて住んでいるばあいは、どうしても気持ちに物を託して表すことが多くなるといいますね。親のほうは、どちらかといえば物は与えてはしくないというのが本音らしくて、「子育てについて、どういった意見のズレ違いがありますか」ということを、自由記述で祖父母と親と両方に

【図7-1】祖父母にしてもらっていること・ベスト5（親の回答）

単位＝%



聞いてみましたところ、三つの点が浮かび上がってきました。

一つ目は、親のほうからは「祖父母は甘すぎる」、祖父母のほうは「親が厳しすぎる」ということです。そういう対立が特に多いのは、おもちゃやお小遣い、おやつとの与えかたですね。菌みがきとちゃんとさせているにもかかわらず、夕飯の後に、お菓子を子どもが欲しいがるからと与えてしまうとか、おもちゃや小遣いを、必要以上に与えてしまう、というようなことです。

二つ目は、親のほうが祖父母に対して「過保護である」という。いっぽう祖父母から親に対しては、子育てに「無頓着である」という。いちばん典型的に出ていますのは、衣服の着せかたで、おじいちゃん、おばあちゃんから「薄着をさせすぎる」という批判があります。

湯沢 親に対してですか？

清水 そうです。親が子どもに薄着をさせるということです。反対に親からは、おじいちゃん、おばあちゃんは孫に雪だるまのように着せると、いっぱい書いてあるんですね。そういうスレ違いがあります。

それから三つ目は、昔と今の子育ての違いということでしょうか。親のほうは祖父母に対して「意見を押しつける」、祖父母から言いますと、「自分たちの意見に耳をかさない」というようなことが出てきました。

この三つの意見のスレ違いがあるのですが、先生方もおっしゃっていましたように、おじいちゃん、おばあちゃんは「子育ては親が主役」と思っていて、祖父母側の記述をみますと、「口出しはできないが……」とか「なるべくなら……」とか、かなり遠慮がちです。

たとえば、ある五十八歳の祖母ですが、こういう書き方をしています。

【図7-2】祖父母にしてもらっていること・ベスト5（親の回答）

単位＝%



「お菓子やるのは難しいですね。気をつかいます。きちんと夜は菌みがきして、その後、お菓子は絶対に食べさせない。かわいそうに思っていると、こちらのほうがしかられる」

その後、「親は子育てに一生懸命、年寄りの出る幕はないように感じられます」とそえられているのです。とっても遠慮がちで、祖父母のほうが一步引いてる態度が表れています。

並木 それはお嫁さんのばあいでしょうか、自分の娘のばあいでしょうか。

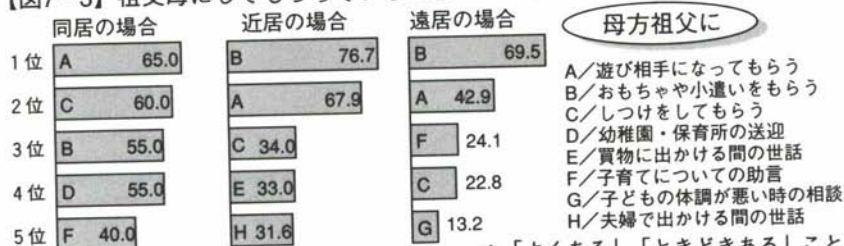
清水 両方ともですね。祖母が別居の娘と嫁と両方に対して、同じように譲歩した態度をとっています。

福島 子どもを育てるのは母親なり父親なりの責任だという前提があつて、その前提は建前としては認めている。しかし、実際には陰でお菓子をあげてしまったり、おもちゃを買ってあげたりということをしているというのが現状ではないでしょうか。

実際には、親を立ててはいる。子育ての原理原則は立てているんでしょう。ただ、教育方針というの、よく育児書に書かれているように理想主義的に考えるほうがいいかどうかとなると、本当はわからないわけです。おじいさん、おばあさんは実際に子育てしてきたベテランであるわけですから、そちらの言っていることが正しいのかもしれない。雑誌はもちろん、有名なスポック博士の育児書に書いてあることでも、実は十年も二十年もたつと書きなおされるようなことなのかもしれない。そういうわけで、母親や父親が思っている教育方針が、おじいさん、おばあさんのせいで実際に完全に一〇〇パーセント行われなかったとしても、それは必ずしも悪いことではないというふうに思いますけれどもね。

【図7-3】祖父母にしてもらっていること・ベスト5（親の回答）

単位＝%



* 「よくある」「ときどきある」こと

▼嫁と姑の対立は？

並木 姑さんとお嫁さんの意見の食い違いというのも依然として大きいようにおっしゃってましたが、今でもやはり、その問題は大きいでしょうか。永六輔が岩波新書で『大往生』という本を書いておりまして、つい先日、パラパラとめくってみましたら、「ああわからない、わからない。嫁の悪口言いながら、孫の器量はほめている。姑の心はわからない」と書いてあるんです。だけど、今でも、「嫁の悪口言いながら」というふうな対立があるのかなという気をもみましたけれどね。

加藤 今は、姑が非常に遠慮をしていると思いますね。

並木 今でもそういうことがあるのかなという気がするんですが、やっぱりありますか。

加藤 あると思います。私どもが結婚したころは、姑を立てて、お母様のおっしゃることは何でも、いちばん先に、という感じでございましたが、このごろはむしろ、逆でございましょう？

並木 昔とは逆の意味で、姑さんとお嫁さんの対立があるということでしょうか。

加藤 はい、それはあるんじゃないかもしれません。

並木 姑さんのほうが遠慮して、言いたいことも言えないというようなことですか。

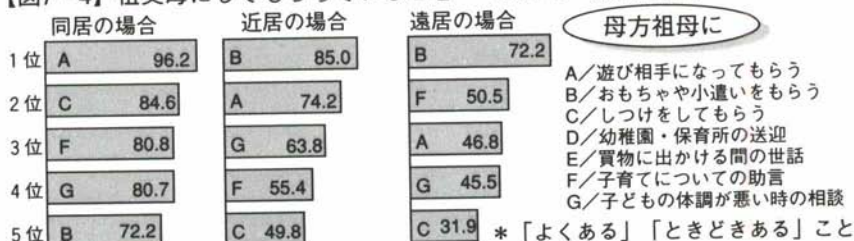
加藤 それもあるし、それから、ちよつとしたことで、嫁のほうが押さえつけられているという感じを抱く場面も多いと思います。

並木 嫁さんのほうも、姑さんに押さえられていると感じるわけですね。

加藤 実際に押さえられている度合いは、それはもう昔のほうがずっと大きかったでしょうが、

【図7-4】祖父母にしてもらっていること・ベスト5（親の回答）

単位＝%



昔はそれでも何も言わなかった。でも今は、ちょっと押さえられても、それをひどいもののように感じるのでは？ そうしたこともあって、姑さんに押さえつけられていると感じているお嫁さんも多いし、それから、お姑さんのほうもお嫁さんに気をつかうということじゃございませんかしら。

湯沢 もう二十年以上前になりますが、岩手県の農家の奥さんの作文集が出ています。『今は嫁が姑で姑が嫁さ』という題名です。自分たちが嫁いできたときは、姑からさんさん、ああしろこうしろと言われ、自分の意見なんか一切言えなかった。年とって自分が姑になって、勇んでそれをおうと思ったら、今度は嫁のほうが威張っててちっとも言えないという。「時代の変わり目にあつたおれたちはなんて運が悪いんでしょう」という作文があつたのを思い出しました。

並木 私は子どもが結婚したとき、「嫁」という言葉が本当にいやでした。使いたくなくてね。あの字が嫌いなんです。もうすこし、いい言葉がないかと思つて、イギリスのドーアさんという方とわりに親しいものですから、イギリスではどういふうに嫁さんのことを言うのと聞いたたら、みんな名前前で呼んでいるという。そうじゃなくて、一般的にはどう呼ぶのと言つたら、「それはサンズ・ワイフだ」ということでした。もし言うとするばね。

加藤 もしくは「ドーター・イン・ロー」でございますね。

並木 「ドーター・イン・ロー」というのは法律上の娘ということで、嫁という日本語に対応しなくてはなりませんけれど、ややしかつめらしい言葉ですね。それ以外にないのと聞いたら、「サンズ・ワイフ」といふうに言いますね」ということでした。それで私は年賀状に嫁さんのことを「サンズ・ワイフ」と書いたことがあるんです。

しかし、だんだん年がたつてくるうちに、嫁さんという言葉を使つても何も抵抗を感じなくなり

ました。加藤先生はどう感じられますか、嫁という言葉を……。

加藤 私どもの世代は、やはり嫁として婚家に入ったわけなんですね。

私たちのころの日本では、長男の嫁、次男の嫁、というように、家庭内での地位が決まったところがありました。

並木 加藤先生は男のお子さんはいらつしやらない？

加藤 男の子どもはおりません。

並木 そうすると、姑さんと嫁さんの関係にはなれないですね。また、息子さんがいらしたとしても、今の若い人たちは、自分が嫁というふうには考えないでしょうね。

加藤 そうじゃございませんでしょうか。

並木 もう嫁という言葉は、あまり使いませんか。それとも、使っても何ら違和感なしに使うのですね、地位とか何かというものを考えないで。

加藤 嫁として相手の家に入るのではなくて、その男性と結婚したという気持ちではないでしょうか。まさにサンズ・ワイフであって、たまたま、その男性に母親と父親がいたというような感じでございましょう。

清水 私の友人に、やつぱりそういう人がいました。「嫁」という言葉がいやでいやで、結婚して姑に連れられてご近所にあいさつに行つたとき、「うちの嫁でございます」と言われて、「私は誰々さんと結婚したんであつて、嫁に入ったんじゃないやございません」と答えたのだそうです。それで、えらいひんしゅくを買つたということでした。たしかに、「嫁」という言葉をきらう意識はありますね。だんだん強くなっているんじゃないでしょうか。

並木 それが進んでいくと、祖父母と孫の関係も、だいぶ変わってくるかもしれませんね。

清水 おっしゃるような傾向は、都市部ですでに、そのきざしが現われてきておりますね。調査の祖父母側データを地域別にながめてみますと、やっぱり郡部では同居が多くて、しかも自分の息子と同居しているというケースが多いです。孫に対する意識も伝統的なものがあります。それが都市部になりますと、ずいぶんそういった意識も薄い、という結果が出ています。都市部では、かかわりの多い孫も、「息子の子」と「娘の子」がだいたい半々ぐらいの割合になっていたのですが、郡部では七対三ぐらいで「息子の子」が多くなっていました。

▼祖父母と孫の時代に

湯沢 今、共働きの人は、奥さんが七、八時間家をあけておばあちゃんに子どもの世話を頼むわけですね。そういうときには、おばあちゃんの判断で、ここでおやつをやってもいいと思ったら、そうしたらいいと私は思います。あとで、娘さんなり嫁さんなりが「ちよつとお菓子をやりすぎじゃないの」なんて文句を言うべきじゃない。八時間、おばあちゃんに委託したんですからね。それが嫌だったら、自分でベビーシッターを頼むなり、別に保育所を探すなりしたほうがいいので、頼んだ以上は、譲ったということだと私は思うんですね。

たとえば私も夫婦は以前、半月単位で外国へ出張したことがあるんですが、娘二人がまだ小学生位だったのですが、ずうっと同居していて、なれているおばあちゃんにまかせたら安心して行けるだろうと、そうしました。

そのとき、うちの家内は、「おばあちゃん、病気ぐらいなんでもないんだから、させたつていいわよ」ということを平気で言いました。「ただし、死なれちゃ困るのよ」と言いました。「それ以外

のことは、母親が二週間も家をあけて出るんだから、ちよつとおなかを壊したり、けがをするぐらいあつてもしかたないと私は覚悟しています。家も掃除なんかしないでいいから、ほこりがうんとたまつてもいいけれど、ただ、無くなつちゃ困るから、火事だけにはしないでね」と私の家内は言つていました。私はそれぐらいいいんじゃないかと思つているんですけどもね。

並木 それはいい奥さんだな。それはそうあるべきでしょうね。

湯沢 アメリカのばあいは、どうなんですか。ベビーシッターに頼んで三時間ぐらいパーティーや観劇に行きますね。そういうときに、お菓子の与えかたなど、厳しく取り決めるんでしょうか。

加藤 たいてい指示を与えます。

湯沢 このお菓子は何グラムとか、何百グラムまでと、はつきり？

加藤 いろいろな細かい指示を与えますね。これをしていい、これはしていけないとか、こうしてほしいとかということ。

ただ、このベビーシッターというのが、昔はかなり信頼ができました。子どもを安心して預けることができたんですけれども、この頃はあてにならない人たちがふえて、それがまた、祖父母の一番が出てきた一つの理由じゃないかと思ひます。

ベビーシッターだけでなく、なにか全体的にいろいろなことがあてにならなくなつてきた。たとえば、デイクアセンターなどでも、日本の保育園は先生たちが一生懸命していらつしやいますよね。でも、アメリカのほうは、かなりいいかげんな所もあります。社会全体に信頼感がなくなつてきて

いるということが言えますね。私は一九五〇年代のアメリカをよく覚えておりますが、その時代から見ると、信じられないような変化が起こっておりますから。

湯沢 先週、ハワイへ行ったとき、一般家庭をたずねて、いろいろ話を伺ったんです。ハワイでも若夫婦は大部分共働きですが、たずねた画家の夫婦は、奥さんが専業主婦でした。どうしてかというと、子どもが三歳と二歳と小さいんで、夫が、四歳までは絶対母親が育てるべきだという主義の持ち主だからです。奥さんは、かつて働いていた経験があるし、本当はフルタイムで働きたいんですが、夫が断固反対なので、しばしばけんかになるそうですが、ともかく今はじつとがまんしている。がまんの原因は、ペビシーシッターなり、預け先の女性が信用できない人が多いんです。すぐヒステリックになって怒ったりとか、なかにはけられるという子もいるし、ひどいばあいは、ハワイでもこのあいだ、殺されたという事件が起こったりして……。

加藤 そうした児童虐待が非常に問題になっています。

湯沢 その心配もあるから、ともかく四つまでは家にいて母親に徹することにしたと言っていました。

加藤 家族のありかたが変化してきているとも言えますね。たとえば、一九五〇年代とか六〇年代のテレビの番組で人気のあった『パパはなんでも知っている』というドラマが、まさにアメリカの家庭のイメージだったのですが、そこには祖父母はクリスマスなどには出てきても、ほとんど入る余地がなかったんですね。ところが、このごろは、おじいさんと孫のドラマが人気です。ちょっと題名は忘れましたが……。

並木 ああ、『じいさんと三人の孫』という題です。

加藤 息子が亡くなって、そのお嫁さんと子どもが、おじいさんと同居するという話ですね。

並木 そうです、そうです。

加藤 このおじいさんが、かつての『パパはなんでも知っている』のようなおじいさんなのですね。問題を全部解決してくれて……。

福島 五〇年代のパパが、おじいさんになったんです。

加藤 そういうことですね。

並木 あのドラマを見ると、孫の扱いが日本とちよつと違うと思いました。一人の人格を認めたような扱いをして、最後には判断を任せるような。日本のじいさんだったら、これしろ、あれしろというふうに言ってしまうんじゃないかと思うようなところも、相手の人格を尊重してやっているというところは、ちよつと日本と違うなという印象を受けました。

加藤 アメリカ人のいちばん嫌いなことは、上から押しつけられることなんです。強制されると本能的に反発して、それがよからうが悪からうが、ともかく真つ先に反発いたしますから。孫に對しても、これしろ、あれしろとは言えないのです。

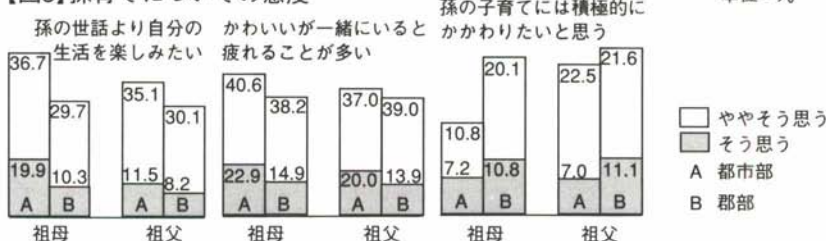
並木 そうなんですね。そういうところは本当にありませんでした。相手を一人の個人というか、人格を認めた上でやっていますね。

▼祖母は子育てには消極的

福島 ベビーシッター役の祖父母ですが、この資料(図8参照)を見ると、あんまりやりたくはないという感じがにじんでいますね。「孫の世話より自分の生活を楽しみたい」人が都市部ではけ

【図8】孫育てについての態度

単位=%



こう多いし、「孫はかわいいけれど、一緒にいると疲れることが多い」という人も三分の二いますね。

清水 そうなんです。やっぱり「孫は来てよし、帰ってよし」でして、「孫の子育てに積極的にかわりたい」という人が、全体では祖父の三二%、祖母では二七%です。

福島 それは「ややそう思う」まで入れてのパーセントですね。

清水 ええ、そうです。

福島 積極的にそう思うという人に限ると、一〇%を切るか切らないかぐらいですね。これから祖父母の出番の時代だとも思いますけれども、祖父母のほうがちよつと積極的ではないところが気になりますね。

清水 特に祖母があまり積極的ではないですね。おもしろいことに、祖父と祖母を比べると、祖父のほうがまだ積極的にかかわりたいと思っている人が多いです。

福島 祖母のほうが、いろいろ世話をしなければいけないからじゃないでしょうか。

清水 やはりそうでしょうか。

福島 お小遣いをあげたり、物を買ってあげたりするのは楽しみだけでも、親と一緒に子育てに悪戦苦闘するのは、「もう一度やるのはしんどいや」という気持ちがあるのかもしれないですね。

清水 そうですね。ただ、それは親と同じような形での子育てにはかわりたくないのであつて、親とは違った、すこし距離を置いたかわりかたを望んでいるというふうに、私は調査のデータを読みました。

というのは、しんどい一方で、孫と一緒にいることが非常に楽しいというのも事実ではないでしょうか。ある六十五歳の祖父が、こういうふうに言っています。この方は、七か月の内孫と一年二か月の外孫という、二人のお孫さんがあるそうです。

「我が子の成長がどのようなものであったか、昼間は勤めで家にいなかったもので、ほとんど思い出せません。でも、孫のしぐさによって、子どもの成長段階が非常によくわかるようになりました。外孫のしぐさを六か月おくれで内孫が同じステップでたどっていく。農業をしながら三度の食事をともにして、同じ屋根の下で生活する。非常に楽しい毎日です」

こんなふうには、定年退職後に孫とのかかわりが新たな生きがいになったと述べています。おじいさんにとつての孫は、おばあさんにとつての孫とちよつと違ふのかな、と思います。

福島 私もちよつと違ふと思います。祖父のばあいは、孫がちよつと客観的な対象という感じになりますね。

清水 おばあさんのばあいは、子育ての知恵とか、役割がわりあい目に見えやすいんですけれども、おじいさんの役割というのは、なかなか、具体的な形では出てきにくいように思いますね。そのあたりは、いかがでしょうか。

▼祖父の役割は？

加藤 湯沢先生は、実際に祖父のお立場として、どんな感じをおもちですか？

湯沢 内孫ができてから三年間、まず静けさがなくなつて、落ちついてゆつくり本を読むなんて

いう時間がなくなりましたね。

祖父としての役割ということでは、実は毎日おむつをたたむのが私の仕事なんです。布のおむつを使っていますから、毎日、干しますね。そうすると、近所の奥さんたちは、「今でも布のおむつですか。立派でいいですね」と、ほめてくれるんですよ。だけど、それを干して、たたむのは僕の仕事ですよ。僕がいったんやりだしたら、それはじいちゃんの仕事だということになって、だれも手を出さないとあります。今晚も、私、帰ったらやんなきゃいけないんです。(笑)

おむつは約三十枚あって、おむつ干しからはずして、たたむのに十五分はかかります。二枚ずつ重ねて、それを四つに折って……。干すにもやはり時間がかかります。細かいことでですけども、そうすることによって、たぶん、いつかは何かを孫が感じて、いつかのときに助けてくれるんじゃないかという思いがいたします。

それ以外に僕は食事の後の皿洗いもやっていますけれども、実はきのう、どういうわけか、『朝日新聞』が「湯沢雅彦の仕事」というのをほめて書いてくれたんです。「皿洗いとおむつたたみのことはちっとも書いてないわね。仕事の半分しか見ていない」と、うちの者が言いましたがね。そういった仕事を毎日やるのはつらいですけど、非常にいい気持ちになりますね。

ともかく孫が登場してきたことによって、いろいろな意味で世界が新しくなったという感じがいたしますね。おそらく孫世代の子どもにとっても、じいちゃん、ばあちゃんがいることで異なった世界を体験して、世界がお互いに非常に大きく広がりますね。子どもを通じての話題が近所でもにぎやかにできますし、新しい友達ができたりするということもありますね。

それから、小さい子が家の中になると、ドタバタしますね。それは空気が震動するという感じで、

まちがいなく活気が出ますね。朝もおちおち寝てられない。たたき起こしにきまして、起きないと布団に潜り込んでますから、いや応なく七時半には起きて、朝寝坊はできないとか、そういうことも非常に大きな刺激で、私は忙しくなって体が弱くなるかと思ったら、反対に健康になってきたという感じがいたします。

並木 今の湯沢先生のお話を聞いて、私も十年くらい前のことを思い出しましたね。ただ、初めの孫がもう中学二年ですから、やや離れてきました。小学校へ行き、それが小学校の高学年になると、孫と祖父、祖母の間もやや距離ができて、孫が来ても家の中は静かになってきますでしょう。まだ、ときどき小学校の低学年くらいの孫が訪ねてきますが、だいたい、嫁さんが連れてくるのですが、そのときはだいたい、私の家の近くのデパートに行つて、何か買う物を決めてくるんですよ。「これはおじいちゃんに買ってもらいなさい」「おばあちゃんに買ってもらいなさい」と決めて来るんですね。

さきほど、あんまり物を買つてやると迷惑だという話もありましたが、そういう面があると同時に、お嫁さんのほうもちゃんと心得て、これとこれはおじいちゃん、これとこれはおばあちゃんというふうに役割分担して、子どもに言い聞かせているようなところがありますね。どうも、おじいさん、おばあさんというのは、小遣いを孫にせびられる立場のような感じもいたします。

加藤 そういう大きな役割を担つてらっしゃるわけですね。(笑)

並木 それが最初のころは夏目漱石ですんだのが、だんだん新渡戸さんになり、福沢諭吉さんに変わってくるんですね。(笑)

湯沢 そういったこともふくめて、男性にとりましては、自分の子育てとは違う子育て経験にな

りますね。

並木 そうだと思います。

湯沢 今、私は毎日おむつをたたんでいますけれど、自分の子どもが小さいときにやったかという、一回だけやっただけです。それを記念に写真に撮ってましてね（笑）、アルバムに張ってあるんです。「たった一度しかやらなかったくせに、インチキだ」と言われますけれど、一度だけだからこそ記念に撮ってあるわけですよ。ところが、今は毎日。今できることを、どうしてかつてはしなかったのか。結局、忙しかったんですね。

並木 そういうことでしょうね。

湯沢 自分の子を育てていたころは、そういう時間がないし、余裕もない。思えば、子どもの育っているところを案外に見ていませんね。この年になって初めて、子どもというのはこう育っていくと、よくわかりますね。

加藤 福島先生は、祖父としての役割をどう思われますか。

福島 清水先生の調査で読んでいただいた方とほとんど同じですね。自分の子どものときには夢中で、やっていたこともあるとは思いますが、覚えてませんし、客観的に観察してませんよね。ところが、孫になると、どうやって言葉を覚えていくとかね……。

並木 そうそう、成長過程がよくわかりますね。

福島 どれだけ知恵がついてくるかということが非常におもしろくて、勉強になりますね。それからもう一つは、僕も含めてそうですが、今祖父になっている世代は、企業人間とか仕事人間というタイプが多いと思うんですね。ですから、実際に子育ての体験をしてないと思うんです。

ただ、人間にとって子どもを育てるといふのは非常に大きな喜びをもたらしてくれるプロセスなわけですから、一度そういうチャンスがあってもできなかったことを、今度は孫のおかげでもう一度させていただく。そういうことで、特に祖父、男性のばあいは、孫の出生は非常に大きな恩寵のようなものだというふうにさえると思いますね。

並木 孫と祖父との関係とはちよつと違いますが、太宰治の娘さんの太田治子さんという作家が『天使と悪魔』という本で、自分の子どもを育てた過程で起きたことを書いています。万里子っていったかと思いますが、その子どもが四、五歳になるまで育てるプロセスで起きたことをです。要するに、自分の子どもが天使であり悪魔でもあるということでも本の名前をつけているわけです。

それを読みますと、太田治子さんの自分の娘に対する観察のしかたが、実に幼児の心理を読んだものでして、私はびっくりしました。幼児が天使としての心と悪魔としての心を使い分けたり、気持ちが変わったりしているところが、実によく表現されています。やっぱり小説を書いている人だからそうなのかなと思っておりましたら、私の嫁さんが二人とも、実に細かに子どもを観察しているんですよ。それぞれ二人、三人いますが、そのきょうだいがどういう心理で、どういう張り合いをするかということを細かに観察している。私も親父になったとき、つまり子どもをもったときに、子どもは二人いたわけですが、そんな観察をあんまりしたことない。記憶がない。これは世代が違うのかなと思ったりしましたね。

もしそうだとすると、おじいさんと孫の間も、私のじいさんのときの祖父と孫と、それから私のときの祖父と孫、それから私の子どもが孫をもつようになったときとは、また違ってくるのかなという印象をもちましたね。

加藤 それは違ってまいりますでしょうね。

▼子どもは老人全体の宝

加藤 最後に、これだけは言っておきたいというようなことはおありでしょうか。

並木 初めて孫ができたときに、人類に対する責任を果たせたというお話が湯沢先生からありましたが、私は思い出してみても、そういう感じよりは、「ああ、息子にも子どもができたか。息子も親としてのよろこびをもててよかったな」という気持ちがいちばんで、自分の血がつながっていくというような意識は、まったくありませんでした。

湯沢 しばらく生まれなかったんじゃないですか。

並木 いやいや、そんなことないです。間もなく生まれたんです。

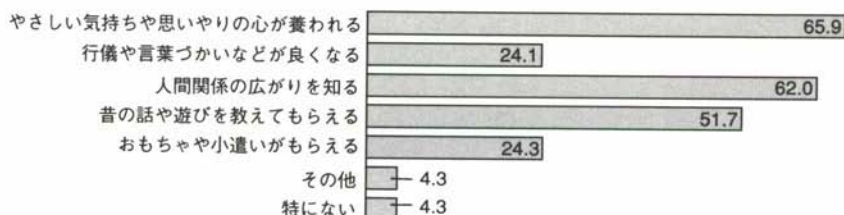
加藤 清水先生はいかがですか。

清水 先生方のお話を伺っております、アンケート調査の結果にだんだん肉づきがついて、「ああ、やっぱりそうなのか」と思うようなところがたくさんございました。たとえば、孫にとつて祖父母はどういうメリットがあるかと調査で聞いているんですね。そうすると、親のほうも、祖父母のほうも、いちばんにあげたのは、「やさしい気持ちや思いやりの心が養われる」という点なのです。(図9参照)

それから「人間関係の広がりを知る」という点も評価されていて、湯沢先生はさきほど、お孫さんが祖父母と親をうまく使い分けるとおっしゃいましたが、子どもは子どもなりに、この人にはこ

【図9-1】孫にとって祖父母とかかわることの良い点（親の回答）

単位=%



ういうふうに接するんだということを、小さいうちから学んでいくのだと思います。それが核家族で祖父母とのかかわりもなく、いつも親と子どもだけでしたら、本当に人間関係が限られていますから、そういったことも少ないわけですね。

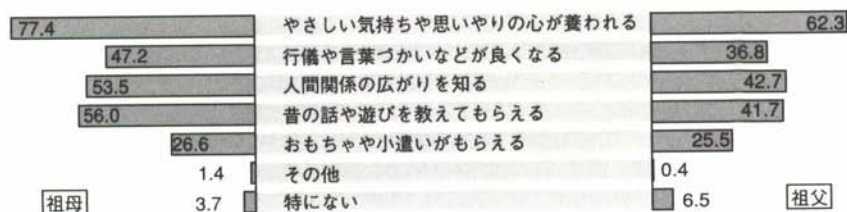
福島 伝統的な郡部などでは昔からの家族の人間関係が続いている部分が多いと思うんですが、都市では今、新しい時代の祖父母と孫の関係が生まれてきていると思いますね。さきほども言いましたように、住宅事情とか女性の社会進出とか高齢化社会みたいなことがあいつて、孫と一緒に暮らす祖父母が増えてきています。これは昔の大家族の復活ではまったくないと思います。また、アメリカのような、いわゆる家族解体の結果としての孫、祖父との関係ともちよつと違うと思うんですね。ブッシュマンの冗談関係とも、やっぱりちよつと違う。いわば日本的な、しかも現代的な新しい形態なので、これをどういうふうにまとめていくか、賢く生きていくにはどうするかということを、これからは考えていかなければいけないんじゃないでしょうか。

そこで、祖父母と孫のありかたを、たとえば老人の生きがいという側から見ることでもできます。公園でゲートボールなんかしているより、孫の相手をしたほうが生きがいにつながるかもしれない。また、外で働きつづける母親の側から見ることでもできます。子どもをおじいさん、おばあさんに預けたり頼んだりして働いている母親もあるわけですから。

そして、そういう複合した家庭のなかでバーソナリティー形成をしていく子どもの側からの視点というのがあります。

いろんな立場から、今は一種の実験をしているような段階ですから、これからどういうふうにしたら賢いやりかたなのかということを考えていく必要があるだろうと思いますね。

【図9-2】 孫にとって祖父母とかわることの良い点（祖父母の回答）単位＝%



湯沢 賢い方法かどうかわかりませんが、その一つとしては、東京のような大都会の真ん中で二世帯住宅というのがやはりつづありますね。うちの近所の例で言いますと、ほとんどが娘夫婦と同居している二世帯住宅です。以前は表札が二つ出ている家が多かったんですが、最近はだんだん一つに統一されています。つまり、男のほうは姓を変えまして、娘方の家族と同一化していつてると思うんです。今、東京の住宅地では、そういうふうすを見ることが出来ます。

私のところは、家の前が四メートルぐらいのごく普通の道路なんです、その道路に面した八〇メートルぐらいの範囲で、そういう家が五軒ほどあります、うちも含めまして。「この通りは『マスオさん通り』ね」ということです。サザエさんのですね。統計的にはわからないんですが、東京のような都会の真ん中では、こういう暮らしが、だんだん人気をもってくるんじゃないだろうかという思いがします。

福島 姓を変えるかどうかは別の問題として、同居の場合にはやはり娘夫婦と同居して、孫からいうと母方の祖父母と暮らすほうが、精神分析的に見てもやさしいやりかただと思いますね。努力が少なくてすむ選択だと思います。事情は家族それぞれに、いろいろあると思いますけどね。

湯沢 私は家庭裁判所に九年ほど勤めていたことがあるんですが、祖父母と孫の紛争というのは、ついぞ出会ったことがないですね。夫婦の争いがいちばん多くて、そのほかには、おじ、おば、きょうだいの争いなどがあります。嫁と姑の争いも相当あります。しかし、祖父母と孫というのは見聞したことがなかったですね。そういうふうな争いになりにくいのが、祖父母と孫の関係じゃないかと思っています。

最後に私が好きな言葉を言わせていただければ、『旧約聖書』の「箴言」十七章十八節に、「孫こそは

老人の宝』という言葉があるんですね。ここで「老人の宝」と言われていて、「祖父母の宝」とは言っていないところが、私の好きな点です。祖父母だけではなくて、ひいおばあちゃんも含め、さらには老人一般にとって、幼児というのは宝物なのでしょう。

そういう気持ちというのは、よく写真を見ても感じますね。ヨーロッパでもどこでも、おじいさんが小さい子を抱っこしているとか、女の子がおばあさんに花束を捧げているとかというのは、とってもいい人間性の象徴のように私は思いますね。

加藤 いいお話でございますね。今後ますます老人と「宝」との関係を、多角的に探っていく必要があるということですね。きょうはおもしろいお話を聞かせてくださいます、ありがとうございます。

（開催＝一九九四年四月十四日）

*グラフは、清水美知子『祖父母と孫のかかわりに関する調査研究報告書』（兵庫県家庭問題研究所 一九九四）により作成。



平成ヤングおばばの弁

沖藤典子

おきふじ・のりこ／ノンフィクション作家



私の周囲は今ちょっとした『おばばブーム』である。あの人にも生まれた、この人にもと、つぎつぎに孫が生まれている。

幸いにしてというべきか、残念ながらというべきか、私には孫がいないので、実感というものがないのだが、相当に可愛いものであるらしい。

しかしながら、最近会った中学時代の友達はこんなふうに言って、同級生の共感を呼んだ。

「私達って人生が長いでしょ。これからまだ二十年か三十年あるじゃない。どう生きていくか、そっちのほうに関心強いよ。孫と言ったって、まわりつくのは四、五年のものよ。孫が生きがいになるには早すぎるわ」

「そうなのよ。まだ五十の半ばで孫ばかりの生活じゃ、もったいないわよ」

とは言うものの、これもまた女性の生き方と大きく関係するもので、共働きを断念した友人は、

「働きたかったけれど、周囲に預かってくれる人がいなくて、泣く泣く断念したのね。今もその状況は変わらないのよ。だから私は、娘に仕事を続けてもらうために、孫の世話を一手に引き受けているわ」

彼女は、娘夫婦の近くに住んで、送り迎えは勿論のこと、残業の時、はやり病気の時、何か困った時と、万全の待機をしている。彼女にとっては、娘が職業人として伸びていくことこそが、まさに悲願であり、その実現のために残りの人生を使っても惜しくない。私の周囲にも若い編集者で、出産と同時に郷里の母親に出てきてもらっている人がいる。

母親をアテにしなければ職業継続出来ない現実と、自分の代理戦争に押しやる母親と、ここには祖父母と孫という関係以上に、親の生きた時代と子の生きる時代と、この二つの時代の働く女性の子育てと職業の両立の問題が存在しているのである。

私達の世代のおばば族は、まだ現役世代でもある。娘も息子の妻も仕事を持っていて、おばばも仕事がある場合は、かつての若かりし日の葛藤の再現になる。

「ごめんね、私が仕事をしているばかりに、手伝ってあげられなくて」

自分が仕事を辞めて孫の面倒みようか、だけど人生はまだ長い、それを考えると辞められない。

そして働き続けるために親の手をアテにした世代は、その親が病氣した時、あるいは孫もすっかり大きくなった時に、親の老いに直面することになる。高齢者の役割として『孫そだて』があったそのことが、後になっての介護の問題になっていく。

「子供の役に立ちたい、子供の迷惑になりたくない、そう思っているけれど、うまくいくか

しらね」

これが、平成ヤングおばばの共通の思いである。

よくいわれることだが、最近は祖父母も二段重ねである。小学生くらいの子供にとってはおじいちゃん、おばあちゃんとイメージするのは、曾祖父母にあたるようだ。

ある特別養護老人ホームに来た小学生が、

「ここに本当のおじいちゃん、おばあちゃんがいる」

と言ったというのもうなづける話である。

一般に「孫に老いを教えるのは祖父母の役割」というけれど、祖父母の世代では、それは無理となり、曾祖父母の世代の役割となった。祖父母と老いとは、密接に関係しない時代である。だからこそテレビなどの視覚的なメディアを使った、意識的な社会の対応が必要となる。

デンマークに滞在していた時、夕方のテレビ番組で、八十歳くらいのおじいさんと小学生が昔の子供の遊びをやっていた。こういう試みを通して、世代を繋いでいくことが大切なのだと思う。家族の中の自然な関係だけには期待出来ない時代になった。

いまだ中年世代である祖父母は、まことに元気で若々しい。その時孫とは、

「私は元氣な老いを孫に見せる。孫には明るい未来を予感させてもらいたいと願っているわ」

これが平成ヤングおばばの弁であった。

「お祖母さん」は「お婆さん」か？ 新しい祖父母の予兆

安藤 究 あんどう・きわむ／鹿児島経済大学講師

あるアメリカ人の文化人類学者が、次のような一節を記している。

「私がインタビュー調査をした日本人の一人に、五十代半ばの婦人がいた。大企業の副社長の妻で、外交的で社交性に富む女性である。最初の孫が生まれたとき、彼女は『祖母』として扱われることを拒んだ。数日の間、彼女は友達や家族にこういつていた。『とにかく、おばあさんとよぶのだけはやめてね。名前で呼んでちょうだい。大奥さんならいいけど、おばあちゃんはずつたいだめよ』（D・プラス『日本人の生き方』岩波書店）

ここで引用した部分は直接祖父母に関する研究というわけではないのだが、引用の内容はしばしば耳にする事柄ではないだろうか。筆者が以前おこなった聞き取りでも、孫が生まれて「おじいさん」「おばあさん」と呼ばれたときの気持ちについて、次のような回答があった。

「いや、もうね、勝手に子どもを生みやがって、人をじいさま扱いするとは何事だ、と憤慨したね。…（中略）…まだ五十代半ばでね（孫が生まれた時の回答者の年齢―筆者注）、気が若いんだよ。それをね、何で人を年寄り扱いしてね、失礼だよ。まあ、そんなことはあったね…」

「私のことをバーバといっていますね。バーバにやってもらいなさいとか…別に何の抵抗もありませんけど…（中略）…外でね、大きな声でね、バーバ、バーバっていわれるとね、アラッ、て思っただけ、恥ずかしいな、って気はしますけどね。」（回答者は調査時点で四十代後半―筆者注）

恐らくはそれ程珍しくもないこうした反応は、よく考えてみると奇妙な感じもする。右の例は、



「お祖母さん」が「お婆さん」と見なされて、また、「お祖父さん」が「お爺さん」と見なされての反応であろうが、疑問に思ふのは、こうした反応のもととなっている「祖父母≠老人」という図式自体についてである。ある人が祖父母となるのは、孫が生まれることによってである。その人が社会的に「老人」である必要はない。理屈の上では、「お祖母さん」になるのと「お婆さん」になるのは別の次元の出来事なのである。にもかかわらず、「祖父母≠老人」という図式は疑問視されてこなかった。これは何故であろうか。一つには、「オバアサン」という音が「お祖母さん」「お婆さん」の両方に用いられるというように、祖父・祖母の呼称と男性・女性の高齢者の呼称が同じ発音であることによるだろう。しかしそれだけでであろうか。そうした言葉上の混同をより強固なものにする要素があるのではなからうか。筆者は、その要素として、「祖父母≠老人」という図式がかつては経験的に妥当性を持っていたということ、基盤を持った「常識」であったということを考える。このことは別の所で検討したことがあるのでごく簡単に触れるが、要はタイミングの問題である。平均寿命が短かった頃―第二次世界大戦までは五十歳未満―には、孫が生まれるタイミングと社会的に老人に移行するタイミングにそれほど隔たりはなかった。したがって、「お祖母さん」は実際に「お婆さん」でもあったわけである。これはあまりにも当たり前であつたために現実が変化してもそのまま「常識」として残り、現在でも孫が生まれた「お祖母さん」は「お婆さん」という位置づけを多少なりともされてしまうのではなからうか。

今、「現実が変化しても」と述べたが、この変化とは、祖父母になるタイミングと社会的に老人になるタイミングに大幅なズレが生じたことを指す。寿命がのびたことによって社会的な老年期の開始は大きくおくれることとなつたが、他方、祖父母となる年齢は、老年期の変化ほど大き

な動きを数字の上では示していない。

祖父母と老人の同一視は、こうしたズレの存在が日常生活の表面にはつきりと姿を現したときに解消される可能性があるわけであるが、こうしたズレの認識は何も同一視の問題だけに関係しているわけではない。われわれが当たり前と思っている祖父や祖母のイメージ、そうしたイメージの変容をもたらす可能性がそこにはあるのではなからうか。ごくごく平均的な祖父母のイメージ、それは「お祖父さん」が同時に「お爺さん」でもあった時期の、また「お祖母さん」が「お婆さん」でもあった時点でのイメージである。現在は「お婆さん」でない「お祖母さん」や、「お婆さん」でない時期の「お祖母さん」を経た「お婆さん」の「お祖母さん」も多く存在しているわけである。「お祖母さん」や「お祖父さん」の姿が大きく変わっても不思議はないだろう。

とはいっても、現時点では具体的に新しい像がどのようなものであるかははっきりしていない。筆者は相反する二つの流れがあると考えているが、もはや紙面もつきたので、その検討は別の機会に譲らざるをえない。ただ、最後に、孫の誕生を喜びで迎えるのは必ずしも自然な感情ではないことを示す報告を紹介しておきたい。この報告は祖父母と老人の同一視を示す例でもあるのだが、ここでは、孫を可愛がる祖父母といった常識的なイメージが実はある社会的条件のもとで形成されていることを、したがってその当たり前なイメージにも変容の可能性があることを示唆するものとして位置づけたい。(年齢的に極端なケースではあるが)

「……やつと新しいボーイフレンドができたというのに。彼は私のことを年を取り過ぎていると思うわよ。こんな若い母親であることでも十分悪かった。それが今はお祖母さんでもあるなんて……」(回答者は三十歳前に祖母となった一人のアメリカの女性)

私の孫たち

ジョージ・T・ジョーンズ George T. Jones

元オックスフォード大学教授・英国農業経済学会会長

訳 荏開津典生 えがいつ・ふみお／東京大学教授

喜びと自由と

子供の信条はこれだけだ

何かしている時もしていない時も (ウィリアム・ワーズワース)

男の子は、危険を仮想するという遊びをすぐ覚える。ロバートは五歳、アンソニーは四歳だが、二年前彼らは私の家の近くのマロウの茂みで遊んでいて、蜂に追いかけられたふりをし、刺されたといって大騒ぎをしていた。

この間も二人は私の家に来た。アンソニーは屋根裏部屋の落とし戸のすぐ傍で遊んでいた。この落とし戸は上から開くのだが、下からはなかなか閉まりにくい。そのように、今では祖父の私には、子供達の仮想の危険がなかなか理解しにくくなっている。子供達は屋根裏部屋に通じる梯子を私よりもずっと自由に登り降りできるのである。私はもうお手あげである。

ロバートはある時難しい顔をして私に言った。

「今度家に来る時は、ちよつと何か別の着物で来てくれない？」

この祖父は、いくらいつても覚えられず、覚えてもすぐ忘れてしまう。子供達の話はなかなか理解しにくい。私は一生懸命きき耳を立てる。ところが、私の聞かせようとする昔話には、彼らは一向に興味を示さない。それなのに、私の妻の話は喜んで聞いている。これがつまり、男の子達の知恵の始まりなのである。

女の子は、多くは男の子より先に言葉覚える。そしてこの言語学上の優位を一生失わないものである。メイはいとこのロバートより少し年上、リーマはいとこのアンソニーより少し年下である。メイはとりわけ言葉がはつきりしていて、そのしゃべり方は愛らしい。やはり二年前、マロウの茂みの傍で、メイはこう言った。

「私の好きな色は紫よ」

メイは生まれた時から恐ろしく活発な子で、早熟である。メイの両親は、メイのやりたいようにやらせて見守っているだけの根気があるが、祖父はそうはいかない。私は藤の苗木を庭に植えるまでさわらせないように、メイの手を十分間しつかりおさえていた。

「もう家の自動車には乗せてあげないから！」

この子の自由が、一時間もおさえつけられたらどうなるのだろうか。

年齢の差もあるけれども、ロバートとメイの方がずっとマセている。アンソニーとリーマは、何時間も静かにしていて、ロバートとメイの芝居の幕間のようである。長男長女は喘息になり易い。一人っ子は大学に進学する確率が高い。このようなことは、両親と祖父母の過保護の結果だ

ろうか？

私の一番上の息子は、喘息にはなったが大学に行くのはまぬがれた。そして結局近々一人の父親になりそうである。私も妻も五人目の孫が出来ることを大変楽しみにしているが、間もなく母方の祖母になりそうなマーガレットの喜びようは大変なものである。彼女にいわせると、始めての孫なのだから嬉しいのも当然ということだが、メイが生まれた時の私の妻の喜びは、それ程でもなかったような気がする。もつとも、私が気がつかなかっただけなのかも知れない。

さて、私の最後の仮説でしめくくろう。私の見解では、出生率がなんとか現在の水準を保っているのは、祖父母の孫が欲しいという願いのおかげである。寿命が短くて祖父母の数が少なかった頃の方が、出生率が高かったではないかと反論する向きもあるかも知れないが、私のいうのはこの世に生きている祖父母だけではない。あの世にいる先祖代々の祖父母も含めてのことなのである。



マイホームはるみ

世代交流型の複合施設

近年、老人ホームを幼稚園や学校と同じ場所につくろうという動きがさかんになりつつある。核家族化が進んで子どもたちがお年寄りに接する機会が少なくなっていること、お年寄りにとっても子どもの姿を身近に見て暮らせることが大きな楽しみになるだろうことなどが、その理由。

東京都中央区晴海にある「マイホームはるみ」も、学校と同じ建物に同居する特別養護老人ホームである。ただし、ここで同居しているのは保育園と中学校で、平成三年六月の開設当時は他に例のない組み合わせであった。もともと、同じエリアに小学校もあり、区ではここを居住地区のセンターと位置づけて現在も再開発を進めている。

区から老人ホームの運営を委託されている社会福祉法人賛育会の鷲尾義之氏（マイホームはるみ副施設長）は、その意義を次のように語る。

「お年寄りからみて、自分の住む地域の子どもたちは、ちょうど孫のようなもの。私たち職員や他のお年寄りとはあまりお話をなさらない方でも、子どもとは楽しそうな笑顔で話されています」

子どもたちとのふれあいがお年寄りの楽しみや刺激になり、そして生きがいになれるという。

では、実際にどんなふれあいがあるのだろうか。まず、保育

園（区立晴海保育園）について、誕生会、雛祭り、七夕などにお年寄りが園を訪れ、敬老の日には逆に園



施設全体図

児がホームを訪れる。それらの定例行事のほかにも、天気がいい日には近くの海辺に合同で散歩に出かける。いつも近くにいたので、一緒に出かけるのが苦にならないという。

中学校（区立晴海中学校）では、毎年の新入生がホームの施設長から話を聞くことに始まり、クラスごとにホームを見学してお年寄りとお過ごし時間をとっている。また、文化祭ではホームのサークル活動の作品などを展示するスペースを設け、その打ち合わせは生徒たちがホームを訪れておこなっている。体育祭でもホームのお年寄りの席を設け、送迎にはPTAのお母さん方があたっている。

それやこれやを合わせて、かなり日常的な交流があるようだ。近年はボランティア活動を正規の授業に採り入れようとの動きもあるが、同じ建物に同居していることで、それが自然におこなわれているわけである。

「マイホームはるみ」は「世代間の交流を通して心のふれあいをはぐくむ教育の場となっている」ということで、平成四年三月には（財）日本フツション協会の「生活文化大賞」を受賞している。

しかし、時には子どももうるさいもの。同居していることで不都合はないのだろうか。その面の配慮

が、ここではよくいきとどいている。建物は中心部に吹き抜けをもつ「ロ」の字型の七階建ビルだが、ホーム、保育園、中学校の区画は完全に分離されている。互いを隔てる壁の扉は、非常時



中庭の「ふれあい広場」。老人ホーム、保育園、中学校の共用スペースになっている。

や特に必要がある場合をのぞいて開かない。窓もマジックミラーの原理を応用した薄い色付きガラスを使っているので、互いに室内が見えないようになっている。音も、ほぼ完全に遮断されている。

ただし、中庭は三つの施設の共用。プライバシーを保ちながら、さりげなく、ふれあいの空間をつくっている。

ふれあいといえば、このホームは面会者が月に六百人と、他の老人ホームにくらべてたいへん多い。それは立地がすぐれているためようだ。

所在地の晴海地区は、付近の佃、月島、勝どき界隈をふくめて、古い木造住宅が残り、井戸端会議や

散歩をしているお年寄りによく出会う下町である。しかし、同じ区内、地下鉄で十分程度の距離に日本橋のビジネス街や銀座の商店街があり、全体としてみれば、いわゆる都心の過疎化が進んでいる。晴海界隈も虫食い状態の空き地や不似合いな新築ビルが目立つ。

こうした事態を改善するために、住民の確保と都市コミュニティの活性化をめざす区の総合計画の一環として、学校と老人ホームの複合施設も建設されたわけである。付近には住宅都市整備公団が高層住宅の整備を進めるなど、居住地域としての開発が進んでいる。



建物の全景。川辺に面し、室内から水のある風景を楽しむことができる。



これまで、東京都では用地取得が難しいこともあって、老人ホームを周辺区・市に建設することが多かった。地方都市でも、老人ホームは郊外につくられることが多い。自然環境といった面ではすぐれているかもしれないけれど、入居するお年寄りにとっては長年暮らしてきた地域を離れなければならず、友人や知人とも切り離されてしまう。面会に行く親族の足も遠のいてしまう。必要性が増しているデイケア・サービスでも送迎に経費と手間がかかるうえ、遠距離ではお年寄りの心理的・肉体的負担が大きい。その点、「マイホームはるみ」は都心に立地する数少ない老人ホームである。その名称は区民から募集し、「地域との密着を」の意味をこめて名づけられたそうだ。

東京都中央区晴海にみられる試みは、お年寄り子どもたちを中心においた「まちづくり」という意味で、少子化と人口高齢化が進む今、これからの地域コミュニティの一つの方向を示すものといえよう。

△「マイホームはるみ」の内部。写真の廊下はもとより、いろいろな場所にゆったりしたスペースをとっている。

ファイアセーフティ・フロンティア'94開催

東京国際消防会議
東京国際消防防災展

このところ、世界は異常気象に加えて、地震や噴火災害が頻発。その面での国際救援活動がもつと必要ではないかという声も高まっている。また、化学災害や高層ビル火災といった、これまでにない災害の不安も大きい。

そんなおり、本年十月十八日から二十二日にかけて、東京消防庁主催ファイアセーフティ・フロンティア'94が開かれる。テーマは「2001年消防―安全へのかけ橋」。「東京国際消防会議」と「東京国際消防防災展」を中心として、海外からの参加者を含め、第一線で活躍する消防士、研究者、都民の代表者など、多くの人が集まって「これからの消防・防災」について語りあおうという国際的な催しです。

「消防会議」は登録が必要（有料）ですが「消防防災展」は無料。災害のシミュレーションを体験できるほか、消防ヘリコプターや救出口ボットなど、最先端の消防技術を見ることができる。



東京国際消防会議 登録が必要（有料）

【主催】東京消防庁

【会場】新高輪プリンスホテル
東京国際消防防災展 入場無料

【主催】東京消防庁・（社）東京国際見本市協会

【会場】晴海 東京国際見本市会場

【会期】平成六年十月十八日（火）～二十二日（土）
午前十時～午後五時

【問い合わせ】東京消防庁 F F '94 推進室

●防犯とコミュニティ③

地域ぐるみの防犯活動

警視庁防犯総務課

一度は防犯活動の体験を！

—「地域ぐるみ」の運動を

都内における昨年一年間の犯罪情勢をみますと、殺人や強盗、あるいは窃盗といった刑法犯が、約二十五万六千件発生し、戦後最悪となっており、また、内容も広域化、悪質化、国際化の傾向にあります。

これら被害の中には、いわゆるドロボウ被害に見られるように「施錠忘れによって泥棒に入られた」など、被害者が一寸注意することによって防げるケースも多く含まれております。

警視庁では、このような実態をふまえて、犯罪を未然に防止するため、防犯協会をはじめ関係機関、団体の協力を得て、都民に対する防犯意識の高揚と啓発活動を地域、職域ぐるみで推進しておりますが、犯罪の増加傾向に歯止めを掛けるまでに至っていないのが現状であります。

犯罪が発生してから、犯人を検挙しても被害者が受けた傷をすべて癒すことはできません。今こそ、

地域、職域ぐるみで「犯罪を未然に防止する」「犯罪の被害にあわないようにする」ことが、何よりも大切であり、このためには、お互いが注意しあうとともに、一人一人の防犯意識を高めていただくことが必要であります。

地域においては、事例で示すように、自主防犯活動が推進されておりますので、一人でも多くの方々が色々な防犯活動を通じ、自らの防犯意識を高めていただくよう協力をお願い致したいと思います。

二 自主防犯活動の推進事例から

各地区では、防犯協会を中心とした活動のほか、ビルやアパート防犯協会、職域ごとの防犯協力会、さらには、自治体、企業、各種団体等によって、それぞれの立場に応じた活動が展開されております。

活動事例をいくつか紹介します。

〈自治体の活動状況〉

○犯罪に強い街作りの推進

N区では、区の建築指導要綱の留意事項欄に、「防犯設備の強化等」を採用のうえ、中高層住宅の建築確認申請に訪れる建築業者や建築主等に対する防犯指導を実施し「犯罪に強い街作り」に努めている。

○暴力団排除活動の推進

暴力団を排除して、地域の安全確保を促進するため、多くの自治体あるいは議会において、「暴力団追放宣言」が採択され、各自治体では、広報誌やたれ幕を活用し、「暴力団追放三ない運動」の浸透を図っている。

△防犯協会等の活動状況

○誘拐防止パトロールの実施

東京都内や埼玉県内で連続少女誘拐事件が発生した際、S署管内のお年寄りが、「主婦が忙しい時間帯、我々が幼児を守ろう」と立上がり、老人クラブが中心となって、公園やその他子供の遊び場をパトロールし、誘拐事件の防止に努めた。

また、都内各地域においても、防犯協会、母の会、PTA等が協力して、小学校の登下校時に通学路において街頭監視を実施し、犯罪の未然防止をはかった。

○自転車盗難防止荷札作戦の推進

H防犯協会では、駅前における自転車盗難防止を図るため、自転車荷札作戦を展開し、更に、自転車の所有者に対し、「自転車利用の自粛と鍵かけの励行」を周知するためのレター作戦を推進した。

この活動を、一週間連続で推進した結果、自転車盗難の被害が減少するとともに、自転車利用者からも「こまめで心配をいただき申し訳ない。できるかぎり協力する」との声が寄せられた。

○防犯パトロールの実施

K防犯協会S支部は、防犯連絡所責任者の中から選任された防犯部員が中心となって、夏休みや年末時期に防犯パトロールを継続的に実施している。

○有害環境浄化活動の推進

S署周辺では、暴力団や不良外国人の露店、S商店街では、暴走族の溜り場となる等環境が悪化したことから、商店街が中心となりJR駅員、企業の社員、防犯協会の支部員等が一体となって集団防犯パトロールを実施し、露店の排除、少年の街頭補導等を推進している。

△新たに展開されている活動状況

○各種防犯活動の継続実施

○防犯協会では、青年部（四十五名）が中心となつて、毎月定例の活動として防犯パトロールを兼ねて

街頭補導を実施している。

また、地域の防犯活動の浸透を図るため、新たなボランティア組織を結成し、毎月「〇九」の日に各種活動を推進するとともに、活動状況をニュースとして地域へ提供している。

○学生ボランティアとの連携

H防犯協会では、H署管内に所在するM大学に対し、地域の防犯活動への参加を要請したところ、大学側の募集に基づき十二名の学生から防犯ボランティアの申し出があった。

そこで、これら学生と防犯協会婦人部とが合同し、防犯チラシに添付する小物づくりをしたり、また、独居老人の慰問を行なった。

また、K防犯協会では、高校生ボランティアが乗り物盗難防止キャンペーンに参加するなど、若年層の防犯ボランティア活動が展開されている。

○婦人防犯指導員の組織結成

A防犯協会ほか二協会では、家庭の主婦を対象として、婦人防犯指導員を結成し、侵入盗難防止のための有害環境浄化活動などが展開されている。

○情報伝達網の構築

K防犯協会ほか、約二十協会では、地域支部や職域支部に対し、防犯ニュースを迅速に伝達するため、

ファクシミリを利用したネットワーク（一斉同報サービス等）を構築し、効果的な運用を図っている。

また、H防犯協会ほか、七協会では、都内ケーブルテレビ局を活用して、暴力団排除や少年の非行防止、ひったくり防止などの広報活動を活発に展開している。

三 終わりに

最近、駅前における風俗環境浄化活動にはじめて参加し、ピンクチラシ等の氾濫状況を改めて知ったという主婦の方から感想が寄せられました。

その内容は、「駅前の環境が、こんなにもひどいとは思わなかった。子供の躾をしつかりやり、悪いことに引き込まれないようにしたい」というものでした。

「一人でも多くの方の参加を」「一度は防犯活動の体験を」を合言葉に、地域の実態にあった防犯活動の推進に協力をお願いします。

次回は、年末に向けた悪質商法の対策について、「もう騙されないぞー」と題して、悪質商法の現状から、犯人の告白、私はこのようにして騙されたなど、身近な事件などをとりあげて、対策面を述べたいと思います。

からだで知った日本②

長野・黒姫山麓、お年よりの笑顔

アン・マクドナルド／上智大学コミュニティ・カレッジ講師

日本の年老いた女性が見せる笑顔を、いつも不思議に思う。
どうして陰りがないの？

どうして、そんな、最高のほほえみを見せてくれるの？

私は今、富夢想野舎^{とむそうやしゃ}というところで暮らしています。長野県上水内郡信濃町の富が原という開拓村に、磯貝浩ほかの仲間が住みついて丸太小屋を建て、自給自足の生活をしながら体験学習する農園と工房の私塾です。薪割り、雪かき、鶏の世話、そして飼っていた鶏をつぶして食料にすることまで、ここで私はいろいろなことを体験しました。

それに近辺の農家のお年よりの対話。ここでは雪ぶかい山村で数十年を生きぬいてきた人々の生の声が聞かれるのです。

たとえばワラゾウリ編みの山本ふじ枝さんは、八十歳近い高齢とは思えぬしっかりした姿勢で背筋をピンとのばし、グイグイとゾウリを編みながら語っ

てくれる。

夫は五十年ほど前に亡くなり、四人の子を育てるためにゾウリを作ってきたのだそうだ。楽な人生ではなかった。

小学校を出たあと、長野県上伊那郡の製糸工場で五年間女工として働き、一時村に帰って女中奉公をした後、今度は大阪の製糸工場へ。二十歳のときに帰郷して結婚するが、十年後に夫が徴用で駆り出された山仕事で事故に遭い、死亡。生活を支えるために民宿で働くが、二年後には彼女も事故で足が不自由になった。すわってできるゾウリ編みをおぼえて、なんとか子どもを育ててきたのだという。

ワラゾウリ作りは、子どものころ、母親が編むの



を見ていたけれど、すすんでおぼえようとはしなかった。夫を亡くし、自分の足も不自由になってから、必要にせまられておぼえたのだった。ワラゾウリを編む母親のそばで無邪気に遊んでいただろう小学校卒業までの少女時代、夫が健在だった十年間をのぞけば、厳しい暮らしの連続だったことだろう。

いま、彼女は戸隠地方で最後のワラゾウリ編みである。「いまは働かなくても困らねえけどさ。すきで

しょうがねえ、この仕事……、お客さんが喜んでほいてくれるから……」と、ニツコリ笑う。

日本の年老いた女性が見せるこの笑顔を、いつも不思議に思う。つらい道のりを歩いてきたのに、どうして陰りがなの？ どうして、そんな、最高のほえみを見せてくれるの？



戸隠地方最後のワラゾウリ編み・山本ふじ枝さん

偏差値教育は本当になくなるか

曾我部泰三郎

そがべ・やすさぶろう／日本在外企業協会海外子女教育アドバイザー
元お茶の水女子大学付属中学校副校長

今春の入試問題を見ると、

出題の方法がかなり変わってきた。

生徒にも安堵の色が見える。



一昨年の秋ごろから、日本国内のあちこちで、入
学試験と偏差値の関係を否定する声が起こつてきま
した。以前から高校入試、特に公立学校の受験に対
し、中学校では、これまで学校内で年何回かの一斉
テストをし、学校内偏差値を決めて親や本人に通知
していました。

一方まちのテスト屋と称する業者は、日曜日に大
会場を借りて、テスト代をとつて、学力テストをし
てきました。こちらのテストを業者テストと言つて
います。この業者テストを受けに来る生徒は、入試
本番の時に近い人数がいますので、学校内のテスト
よりも、入試については客観性がありました。いい

かえますと、本番と同じぐらいの人数で、問題も専門
家がつくつていきますので、二月、三月に行われる本番
と同じテストを一学期のうちから毎月やっていたわけ
です。

そして、毎月の成績報告には学校単位も出るし、個
人については、三教科、五教科の偏差値は勿論、各教
科のどの部分が弱いからという注意まで細かくコメン
トがついて返されるのだから、本人も親も学校のテス
トよりも、業者テストの方を信頼するようになります。
学校の担任の先生までが、入試直前になると、志望
校を決める時に、業者テストの成績の推移を見ながら
指導をするようになってきました。

公立の学校にこれまで合格した生徒の入試成績と日頃のテストでとっていた成績とは、業者が完全に近いまで調整していて、毎年偏差値を少しずつ修正すれば、この業者の偏差値どおりにしたがえば合格するといふものでした。

一方私立高校でもかなりの学校が、この業者テストを信頼して、入学願書を出す直前に、このテスト四～五回分の偏差値を持参すれば、その場で合格内定ということも行われていました。

一方生徒の方は、三年生になると、学校の授業は入試に関係ある教科のみに心をよせ、他の教科は出席しているだけという場面があったり、偏差値を上げるための勉強をしていたりします。

これでは、文部省が日本国青少年のために義務教育を行い、豊かな人間を育成するという、単純明快な教育の理想とは全く反対の方向へ走っていたことになりました。これも二年間や三年間ではなかったのです。何十年もの間このような教育が行われていたのですから、入試には強くなっても、学習に興味関心を示し、人格の形成に目を向けて、人間の基礎を確立するなんてこととは別の世界のことになってしまっていたのです。

そこで埼玉県教育委員会などが、偏差値教育の変

更に立ち上がったことは記憶にも新しい事です。文部省も先の先を読んで、此の度は決して後もどりをしない教育改革を実施しようとしています。

まだ日本中の学校でどうすればよいのか戸惑っている部分がかなりありますが、今回は教育方法が徐々にではあるが変わってきています。

まず入試から変わっていくでしょう。すでに今春行われた入試の問題を見ますと、出題の方法がかなり変わってきています。もうしばらく様子をみたいところです。一方生徒の方は少々安堵の色も見えはじめています。

以上のような偏差値教育は、日本で何十年も行われてきましたが、ここに来て何とかしなければという声と共に学校の内外から大きな動きが見えはじめてきました。欧米の先進国ではもうこんな教育をしている国はありません。偏差値教育の下で、子どもたちは、もつと大きく成長する筈の人格が萎縮して、諸外国の同年輩の青少年より自己形成が立ちおくれているのです。

偏差値教育がなくなれば、勉強しなくてよいというわけではありません。勉強は今まで以上にしなければならぬことはいふまでもありません。ここ数年で学校教育の様子が一変するでしょう。

お父さんの子育て

父親の子育ては、妻にも、子どもにも、自分にも効用がある。
育児や子育てに積極的なお父さんを応援したい。

牧野 カツコ

まきの・かつこ／
お茶の水女子大学助教授



最近の若いお父さんは、育児や子育てを随分するようになった。「育児は女の仕事」などと豪語する硬派の父親は、いまだき妻にも子どもにも嫌われる。妻に促されてシブシブ、という父親もあるかもしれないが、子どもの世話をするのが楽しいという父親もある。いずれにしても、「お父さんの子育て」には、いろいろな効用があることが確かめられるようになった。私たちがこのところ取り組んでいる研究から御紹介すると、次のようなことになる。

その一つは、お父さんの子育てではまず母親に効用があることである。父親と一緒に子育てをしている夫婦では、母親は幸せな気持ちで子育てを楽しんでいるということがわかつていく。子どもが煩わしく

てイライラするとか、子どもに当たり散らしたりすることの多い母親は、子育てに夫を頼ることができないと、諦めている場合に多い。たとえ子どもと接する時間が短くても、父親が子育ては夫婦の仕事、と考えているならば、母親は子どもに対して安定した良い精神状態で子育てができるというわけである。

その二つは、お父さんの子育ては、子どもの発達に効用があることである。子どもの世話を良くしたり、子どもと良く遊ぶお父さんの子どもは、発達の状態が総合して良いという結果がみられるのである。横浜にある家庭教育研究所では、幼児教室で三歳の子どもの集団保育をしながら親たちの家庭教育の援助や研究をしている。この教室に通う子ども達一

三〇名について、三歳六か月時点で発達の程度を研究員や保母さん達が十八項目について五段階で評定したデータと、その父親と子どもとの普段のかかわりの程度を対応させてみて分かったことは、父親の子育ては子どもの発達に効用あり!という結果だったのである。とりわけ、休日に子どもとよく遊ぶ、身体を使った遊びをする、家庭で自分のことより子どもの世話を優先するお父さんの子どもは、自発性、言語性、社会性などの面で発達が良いのである。また、このお父さんは、父親になったことに肯定感をもっていて、父親であることに喜びを感じているという傾向もみられた。

お父さん! お子さんともっと楽しく遊んでください、それはお子さんにもプラスになるのです、とまさにいい結果である。

一と二の効用だけでもお父さんの子育ての効用は十分といえそうだが、さらに三つ目を付け加えることができるのである。第三の効用は、子育てをすることによって、父親自身を発達させるというものである。

多くの母親達は、「子育てによって自分も成長している」と感じていることがいろいろな調査からわかっているのだが、この成長とは何なのだろうか。視

野が広がったとか、忍耐力ができたなどという面もあるだろう。職業の中で発達する能力とは違って、子育ての中で発達する最も重要な特性を、私たちは「柔軟性」ではないかと考えたのである。

子どもはもともとマニュアルどうりには行動しないし、機械的には反応してくれない。能率や効率を追及する職場とは全く違う。臨機応変まさに柔軟な対応が必要なのが子育てで、これが子どもを育てる面白さでもあり、苦勞でもある。子育てによって、親もこうしたパーソナリティの柔軟性を育てられているのではないかという仮説から、調査を行った。予想のとおり、子どもの世話を良くするお父さんは、柔軟性が高いという結果が見られたのである。もともと柔軟性の高いお父さんが、子どもの世話を良くするのか、世話をするうちに柔軟性が高くなるのか、いま分析をしているところである。

いずれにしても、父親の子育ては、妻にも、子どもにも、自分にも効用あり、ということとは間違いないえそうである。育児や子育てに積極的なお父さんを応援したい。

淋しい女たち

戦後の激動期を夢中で生きぬいて今老境にさしかかってきた私たちは、新しい生き方には理屈では肯定するものの、感情的には納得できず孤独感にさいなまれている。

ことは、第二次世界大戦が終了してからあしかけ五十年である。

「忘れませんわ。防空壕に手をかけたなり焼けこげていた姿や、お米の配給で並んでいたところを機銃掃射でやられてお魚を並べたようにズラリと死んでいた姿を」とか、「特攻隊員にデートにさそわれて戦闘機に乗って夜の空を飛んだんですよ。特攻隊の人は、その晩赤いお膳が配られた人が翌朝出撃するということでねえ」などと「あの時代」を共有した我らシルバーたちには忘れがたい幾多の思い出がある。飢えの経験から、学徒動員で働いた飛行機工場の機械油の匂いまで、年ごとに色濃くよみがえってくるのは、これこそ老いの徴候なのか。あれから足かけ五十年。考えてみれば私たちの生活は激変した。テレビや冷

川原千寿子

かわはら・ちずこ／
ジャーナリスト・
文化女子大学講師



蔵庫や電気釜のない家はないし、車だって田舎じゃ一軒で三台もある家すらある。

道路の上に道路が走るんだって？ とおどろいたのは東京オリンピックの頃だったか、はりめぐらされた高速道路や新幹線の拡充でおよそ便利な時代になってきたものと思う。だがこの頃思うのだが、果たして女性の生活がそれになったのだろうか。

私が結婚した頃夫の郷里の徳島県に行った時、村にはまだ水道もガスもなかった。家の回りをゆるやかに流れる小川で洗たくし、炊事は山からとってきた柴をかまどにくべてするのである。おじいさんは山へ柴刈り、おばあさんは川へ洗たくに、そこにどんぶりこつこと桃が流れて来て中からりっぱな男子が生まれたという桃太郎の説話さながらの生活環境であった。同じ家の中で老夫

婦と、若夫婦と食事を別にしている家があつて人間のすることではない式の非難を浴びているという話をきいたのを覚えてゐる。もはや「戦後ではない」と経済白書でうたわれた年のことである。小川のはとりの家の縁側にまっ白な洗たく機が置いてあつた。井戸は遠く台所の方にあり、小川はそのまた先である。どうして縁側に置いてあるのだらうとふしぎに思い問うと、そこは最近「嫁が来た家で、花嫁道具に」嫁の親が持たせて来たのを、これ見よがしに近所に見せびらかすために置いてあるのだという。「でも使う時、一々運ぶのですか?」と問うと姑は笑つて「電気代がかかるから洗たく機は使わんのよ。嫁はただですけんね」というではないか。

それから約四十年、時代はかわつて、この田舎でも最初から同居という家はめつたに居ない。若夫婦は共働きで、子供は保育所にあずけ、若い夫は、子守から家事手伝いから大変である。嫁がつわりの時は、姑が食事を作り、毎朝オートバイに乗つて舅が、若夫婦の家にそれを届けるという家もあつた。

気がついたら姑に仕える時代から嫁に仕える時代になつてしまつたのである。

それくらいにしないと、田舎じゃ特に、息子に嫁がこないのである。それでもオートバイで行けるていどの近くに住んでもらえば極上の方だ。

都会でも子供夫婦を親夫婦たちが引っぱりあいである。ものわりのいいことをいつていたら負けである。負け方は「せめて一月に一回、電話ぐらくれなくてもいいと思いますかねえ」となげき、孤独感をかみしめている。

私の友だちは地域の講演会に呼ばれて「これから男性も家事を手伝う時代。男は外で働き女は内で家を守るという男女役割分業的な女性のありかたを奴隷の幸福といった人もいますが」と解説したところ、異議あり!と憤然と立つたご婦人が「あの戦後のひどい時代に夫は夢中で働き、私も夢中で子供を育てました。私が外で働いていたら子供なんか育たなかつた。その生き方を奴隷の幸福とは何ですか」。涙をこぼさんばかりに怒つたという。私もやっぱり地方に行き、別の日に講演した女性が「私は夫の下着など洗いません。二人とも働いているのだから」といったところ、会場がどよめいて非難ごうごうたるさわぎになつたということを聞いた。

戦後の激動期を夢中で生きぬいて今老境にさしかつてきた私たちは、自分たちの生き方を否定され新しい生き方には理屈では肯定するものの、感情的には納得できず孤独感にさいなまれてゐるのである。レストランやバスツアーに集い群れている女性たちを見るたびに「淋しい女たち」と私は思うのである。

とりあえずご同伴で

専業主婦も中高年になれば、
相当に場数を踏んで鍛えられている。
妻たちの話には事実の迫力があり、
夫たちの大所高所論より、
はるかに面白い。

夫婦同伴といえは、何の不思議もなく奥さんを伴うこと、と反応するのが、男性本位で動く日本のジョーシキらしい。私の狭い経験ではそれが一般的で、夫同伴の催しや旅行はまだまだ少ない。いや、正確にいうと私の卒業した女子大学の園遊会には、ごく少数の夫たちが遊びに来る習慣が昔からあるけれど、普通は奥さんの身内の集まり等にお義理で顔を出すのがせいぜいのところだ。

そのありきたりの「妻同伴」の一泊温泉旅行に最近でかけた。元の職場の仲間—とはいっても四十代から六十代の、なんとなく集まった十組の夫婦、行き先は熱海、おまけに会社の保養所。何とまァ月並みな、と言われそうだが、正直なところ私もそんな気分であった。私たち夫婦は職場結婚だから、こう

藤原房子

ふじわら・ふさこ
ジャーナリスト
商品科学研究所所長



いう時私は「妻、兼同僚」である。

会社での関係がいくらか目障りだけれど、お互い立場が変わったこと、実は私も退社したてのホヤホヤで、その他仲間の引退、後輩の昇進など、何やかやの理由が重なって、行かなきゃ角が立つという事情があつた。

私は旅行でも懇親会でも、遊びなら喜んで出かける方だが、実をいうと初対面の奥さんたちとうまくコミュニケーションできるかしら、という不安はいくらあつた。一緒に旅行をしたことのある二人を除けば、七人は初対面だ。丁寧な挨拶や失礼のない言葉遣い、服装にも気をつけて、などと思案したあげく、エイ面倒と開き直ることにした。

ところが意外や意外、それらはすべて取り越し苦

勞で、むしろ奥さんたちが混じったおかげで座がほどよくなごみ、自然に話はずみ、男性たちの「粗暴さ」もやんわり抑えられたのは予想外の大収穫だった。

専業主婦も中高年になれば地域での多彩なつきあいで、相当に場数を踏んで鍛えられている。夫の会社での地位や収入などまで、互いに先刻ご承知だから、つまらぬ見栄の張りようもない。服装も特別におしゃれをしてくるのが野暮だと心得ていて、デパートの期末バーゲンに出動する程度にラフだった。

夕食では二十人の男女が、くじ引きで決められた席につき、全員がテーブルスピーチをした。会社での顔と家庭とのギャップが話題になって夫婦共にはしゃいだ。堂々たる主役はたくましく奥さんたちだった。「某氏は還暦の祝いにボーナスが吹っ飛ぶほどの高額の手当を買った」と山内一豊の妻ばりの「美談」を、友人がやかみ交じりに披露すると、「実はそれ以上の額の毛皮のコートをこっそり買ったわ」と暴露したのは一豊の妻自身で、その瞬間ポカンとした「一豊の妻の夫」を見て、みな涙が出るほど笑いこけた。

妻たちの話には事実の迫力があり、日頃聞き慣れている夫たちの大所高所論より、私にははるかに面

白かった。明かにこういう場では奥さん達の方が一枚上手である。ふしぎなほど不協和音がなかった。むしろポリウム調整器がこわれたような大声で、がんがんとたれるよりも、ソフトな中年女性の声で異なる波長の話が混じったことが、新鮮で、耳にすこぶる快かった。

何の屈託もなさそうに笑い興じていた奥さんの一人から、後日はがきをいただいた。繊細な文字で「会社人間の夫が、お仲間はどう見られているかしらと不安で、出かけるには少し勇気がいりました」とあった。そんな心配などはかけらほども見せなかった人なのに。きつとそうした隠し味がきいて、楽しさにコクが増したのだと思う。

男女が半々で交じると、話にも遊びにも豊さが倍増する。人生の残り時間は短くなる一方だから、なるべく同伴のチャンスを増やすためにも、夫たちは妻たちの集まり等に、もっと平気な顔で、もっと堂々と出るようにしたらどうだろう。そして中年期も、できるだけ若いうちから、男女が同席することに慣れるといい。それがさりげなくできるのは器量の大きい、自信のある男性だと私は思う。



「読者の声」

昨年六月、姉は頸椎損傷で手術を受けた。七十歳だし、病巣がかなり拡がっていたので、手術は成功したが手足に痺れが残った。

この病院は企業のトップが、社会への利益還元のもと、建てられたと聞く。

気儘な姉は食事を最も苦にしていたが、給食が届くと「おいしそう」といい、自家では飲まない味噌汁も毎朝頂いて、私たちを驚かせた。

それにもましてナースのやさしく親切なこと。患者の担当は毎日かわるらしいが、分らずに、朝の検温時に緩下剤を頼むと就寝前に必ず渡して下さるという風に、どんな事でも、どのナースにお願いしても立ち消えになることは一度もなかった。お陰で百日間の入院生活はまことに快適で、杖を使用すれば自分の足で歩けるようになって退院した。

家の近くにもリハビリ病院はあるが、車で三十分以上かかるこの病院へ姉はいまだに週二回通院している。タクシーに乗ると「随分遠方まで」といわれる。「私もあそこへ入院したとき看護婦さんが毎日体を拭いてくれて……女房でもしてくれませんか」という運転手もある。

姉が初めてここへ来たとき、車からおりて息子がオンブしようとしたら、警備員さんがすぐに車イスを持ってきて下さった。その敏捷な親切に感激したという。

ある朝いつものように、受付機へ診察券を挿入。ふとエスカレーターの方を見たら、老人が手すりにぶら下がっている。「?」。「?」。そのとき受付機の側の男性係員がサッとエスカレーターを走り昇り、間一髪で老人を抱きとめた。係員さんは何事もなかったようにおりてきた。周囲の人はほとんど気づかなかった。これらのスタッフのさりげない気配りが、私たちにとってどれほどありがたいことか。

患者の大部分は、この企業の関係者か地域の人たち。リハビリ室など実になごやかで、家族のように皆が声をかけあっている。「○○さん昨日入院だつて、五階へ寄るわ」と情報交換もある。廊下でも玄関フロアのあちこちでも、出逢いがあってコミュニケーションが深められている。

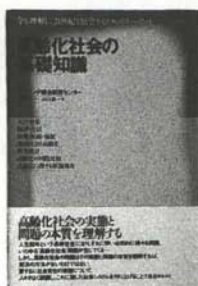
願わくばすべての病院が、このようなゆたかなコミュニケーションの場であれば「病も気から」治るのも早いのではあるまいか。

(藤井寺市 稲見正子)



BOOK REVIEW — ブックレビュー —

高齢化社会の基礎知識



編＝エイジング総合研究センター

著＝岡崎 陽一
山口 喜一

A 5 判・並製

130頁・2000円

中央法規

【目次】

人口・世帯／経済・生活／保健・医療・福祉／将来推計／他

今後の21世紀初頭にかけて、世界に類例のない速さで人口の高齢化が進行するわが国にとって、「高齢化社会」の動向とその対応は社会的経済的に大きな課題となっているが、本書は、「高齢化社会」現象の実態、その動向に伴う社会変化の必然性など、高齢化社会とその問題の本質を理解することを目的に上梓したものである。

読者各位が高齢化社会やその問題について考えるとき、本書がいささかでも役立てば幸いである。

〔「あとがき」より〕

生活者の発想



著＝三枝 佐枝子

四六判・並製

254頁・1300円

実業之日本社

【目次】

生活者の登場／提案する生活者／より良い暮らしを旨とする生活者／生活者とモノとの間で／これでのよいのか生活者の実態／他

「生活者優先」「生活者重視」と言われながらも、現実にはなかなか生活者の声は聞き入れられないし、生活者が望むことが、すぐに実現されるとは思われない。しかし時代は、どのような政権であろうとも生活者をなおざりにはできない趨勢に向かっていることは確かである。

ささやかなこの本が、生活者と行政・企業との理解を深めるために役立ち、生活者の願いを生かした政策や企業活動がさらに進展することを望みたい。

〔「おわりに」より〕

実態とニーズを探る15篇



著＝天野 郁夫
四六判・並製
242頁・1648円
東京大学出版会

【目次】
大学の改革をめざして／大学変革への課題／大学改革／大学評価／内部組織／大学入試／大学再考／後継者養成／学部教育／他

マス高等教育が「熟成」の時を経たいま、あらためて問い直されようとしているのは、そうした近代大学的でエリート高等教育的な理念と組織構造そのものなのです。

改革のブーム現象は、すべてのブームがそうであるようにやがて終熄の時をむかえ、改革熱は冷めるかも知れません。しかし問われているのが大学、高等教育の基本的な理念や構造である以上、それによって変革の必要性、必然性までもが消えうせるわけではありません。ブームとかかわりなく、個々の大学と、そこを宿り場としている大学人は、変革を問いかけれられ、また自ら問い返していかざるをえないのです。そしてこの本で試みてみたいと思っているのは、そうした問い直しの作業に必要な問題点の整理と、提示に他なりません。（「はしがき」より）



著＝西嶋 公子
B6判・並製
240頁・1300円
家の光協会

【目次】
「あたたかい死」を求めて／老いを見つめて／「暖家の会」の始まり／「暖家の会」への取り組み／欧米に学ぶ、人間的なケアの思想／他

世界のなかで、他に類を見ないスピードで高齢化社会を迎える日本。ことに、私たちを含む「団魂の世代」は、いっきよに高齢化率を押し上げる存在でもあります。自分自身を含め、私たちはどう年を取り、どう病んで、どう最期を迎えるのか。この問題こそ、すべての日本人にとって共通の課題であり、人としてのQOL（クオリティ・オブ・ライフ＝生命の質）を保障された生と死こそ、共通の目標となるはずです。

私の軌跡を記すなかから、あたたかい地域介護のあり方の方向性を提示しました。そのような観点から読んでいただければ幸いです。日本じゅうの各地に、QOLの改善をめざす生活者たちの草の根運動が広がることを期待しています。

（「はじめに」より）



編＝財失野恒太 記念会

A5判・並製

600頁・2400円

国勢社

【目次】

世界と日本／経済の歩み／世界の国々／気候／国土利用と国土開発／人口の動き／府県と都市／労働／国民所得／わが国の資源／他



編＝フォーラム女性の

生活と展望

A5判・並製

208頁・2800円

ミネルヴァ書房

【目次】

家族の変化／女性労働の実像／親の子ども観／女性の社会活動／暮らし向き／余暇の現状／他

自民党単独政権の崩壊・イスラエルとPLOの和平の促進など、昨年も、国内でも世界においても、大きな・政治経済上の事件が続き、社会の底辺で大きな変化が起きてきていることが見逃されがちである。この見逃されがちな事のなかに、日本の犯罪情勢が悪化していることがある。このほど発行された『日本国勢図会94/95』によると、一九九一年いらい犯罪認知件数が増え続けており、しかも、殺人・強盗・放火・強姦という凶悪犯の認知件数はそれよりはやく一九九〇年いらい増加している。これについては、様々なレベルで問題解決への努力が続けられてきているのであるが、報道される事件のいくつかは、市民の一人一人が他人の行動に健全な関心を持っていれば、防げたと思われる。それにしても同書は、様々な社会的関心と呼び起こさせてくれる幅広い内容を持っている。

本書は女性に関するデータを、家族・家庭、労働・仕事、教育・学習、社会参加、生活・消費、余暇活動、心・からだ、高齢化社会の8つの分野にわたって収集した。収集にあたっては、中央官庁が発表した統計だけでなく、地方自治体の調査資料、民間調査会社の資料などからも積極的にデータを引用した。

わかりやすく、しかも知りたいデータを過不足なく盛り込みたいという欲張ったことを目指したが、もともと仕事上の必要性、学習する際の興味から出発した収集だっただけに、結果としてデータに偏りがでたかもしれない。

本書に掲載した統計図表を概観することで、現在の女性問題のありかがある程度提示できたのではないかと思う。手にとったくださった方の興味や必要によってご利用いただければ幸いである。（はしがきより）

【編集委員】

天野郁夫
佐開津典生
加藤恭子
戸沼幸市
藤原房子
前田和甫
牧野カツコ
松方 健
湯沢雅彦

【編集後記】

▼少子化が進んでいる今、「祖父母四人に孫一人」などといわれます。人口の逆ピラミッド化が親族の間でもみられるようです。当然、祖父母と孫の関係にも昔とは違う変化が多くおこっていることでしょう。本号の特集「祖父母と孫」を、家族関係の新しい側面を考えるきっかけにしたいできれば幸いです。

▼今号から「中高年のライフスタイル」の執筆者が藤原房子氏に変わりました。また、次号から、「教育じろん」の執筆者が濱田陽太郎氏に、「シルバー通信」は高橋博子氏に変わる予定です。ご期待ください。

地域社会研究所刊行物 No.148

コミュニティ
No. 107
…祖父母と孫

1994年8月15 発行

頒価 500円

発行 財団法人 地域社会研究所

〒100 東京都千代田区有楽町一―三―一 第一生命館

電話〇三(五二二一) 四六五四―六 FAX〇三(三四五一) 六五五八

取扱 株式会社 国勢社

〒一〇五 東京都港区芝二―五―十 芝公園NDビル

電話〇三(三四五四) 七〇九五 FAX〇三(三四五四) 七〇九四 振替 東京2、376

制作 学習研究社/地人館 印刷 大日本印刷株式会社

落丁・乱丁があればおとりかえます。

地域社会研究所について

この財団法人は、近代のかつ民主的な地域社会（コミュニティ）の発展に寄与する目的で、第一生命保険相互会社が剰余金の一部をさいて基金を提供して、昭和三十八年十月十日に設立されました。

その事業としては、

- 一、近代的市民意識で裏づけられた地域社会観念の確立についての調査研究
- 二、近代的地域社会観念の啓発と普及
- 三、近代的地域社会を形成する各分野の調査研究
- 四、前記の諸事業についての実験と指導
- 五、地域社会についての書籍、パンフレットの刊行などを行います。

これらは、いずれも人間生活の全般にわたる大きな問題で、たいへんむずかしい問題でありますので、研究所の組織は、広く各分野にわたる権威者の方々をもつて構成されております。

今後事業の成果により、わが国の地域社会における産業、文化、教育、福祉厚生、建設、自治などの面の諸問題がしだいに解明され、いささかなりとも、新しい日本の社会の実現と発展に役立つことを念願する次第であります。

なお、この研究所の役員は、つぎのとおりであります。（五十音順、敬称略）

理事長

西尾 信一 第一生命代表取締役会長

常務理事

松方 健 第一生命元部長

理事

青井 和夫 流通経済大学世代間交流研究所顧問

磯村 英一 文学博士・東京都立大学名誉教授

櫻井 孝穎 第一生命代表取締役社長

高山 英華 工学博士・東京大学名誉教授

中根 千枝 東京大学名誉教授

並木 正吉 食糧・農業政策研究センター理事長
工学博士・東京理科大学教授

日笠 端 医学博士・帝京大学教授

前田 和甫 医学博士・女子栄養大学副学長

宮坂 忠夫 第一生命元審議役

宮脇 泰 お茶の水女子大学教授

湯沢 雍彦

監事

山口 正義 医学博士・結核予防会顧問

山本 長弘 ライフデザイン研究所代表取締役社長

評議員

天野 郁夫 教育学博士・東京大学教授

荏開津典生 農学博士・東京大学教授

奥田 道大 社会学博士・中央大学教授

加藤 恭子 上智大学講師

加藤 秀俊 社会学博士・放送教育開発センター所長

五代利矢子 評論家

三枝佐枝子 婦人少年協会会長

園田 恭一 保健学博士・東洋大学教授

塚本 亮一 第一生命相談役

戸沼 幸市 工学博士・早稲田大学教授

内藤寿七郎 医学博士・愛育病院名誉院長

日端 康雄 工学博士・慶応義塾大学教授

藤原 房子 商品科学研究所所長

牧野カツコ お茶の水女子大学助教

山口 喜一 東京家政学院大学教授

米林 喜男 順天堂大学助教

顧問

矢野 一郎 第一生命相談役

出版案内

以下の出版物は市販していませんので、購読ご希望の方は当研究所へ直接お申し込みください。(送料実費)

高齢者を生きる

A5判 頒価300円

★印は品切れです

第1号	高齢者人口の問題点	第11号	同居の知恵・別居の知恵	第21号	高齢者と食事
第2号	高齢者家族	第12号	寿命世界一をめぐって	第22号	年金—その新しい仕組み—
第3号	定年 ★	第13号	年金	第23号	現代老親扶養論
第4号	高齢者の生活の記録より	第14号	兼業農家のお年寄りたち	第24号	続 現代老親扶養論
第5号	オーストリアの高齢者と家族	第15号	働く力—高齢者		老人生活の国際比較
第6号	高齢と体力	第16号	高齢者問題にどう答えるか?	第25号	八十にして伝う
第7号	お茶の水出の50年	第17号	農村高齢者の移りかわり	第26号	大井町のお年寄りたち
第8号	のぞまれる高齢者の学習	第18号	高齢者のための住宅	第27号	ボランティア活動(最終刊)
第9号	楽寿の哲学	第19号	高齢者とレジャー		
別冊	各国人口の高齢化	別冊2	世界の人口像		
第10号	思い出は遠くまた近く	第20号	ほけないための暮らしと工夫 ★		

『高齢者を生きる』は昭和46年の発刊以来、高齢者問題について、さまざまな角度から考察してまいりました。しかし、この問題は、地域コミュニティとの関わりが非常に深く、コミュニティを抜きにして語ることではできません。

そこで、今後は『コミュニティ』誌の中で高齢者問題を取り上げることとし、第27号(昭和63年刊)をもって最終刊といたしました。

コミュニティ

A5判 頒価/第1号〜88号

300円、第89号から

400円、第103号から

500円

★印は品切れです

第1号	コミュニティのありかた	第5号	家庭のしつけとコミュニティ ★	第9号	家族と親族 ★
第2号	新しい農村生活	第6号	老人問題とコミュニティ	第10号	健全な子どもの育成
第3号	地域社会と婦人	第7号	コミュニティと青少年	第11号	今日の教育を考える ★
第4号	都市生活とコミュニティ	第8号	日本人のつきあい	第12号	レクリエーションとスポーツ ★

第13号	健康なまち
第14号	交通安全とコミュニティ
第15号	日本人のことばと話し方
第16号	テレビと家庭生活
第17号	家庭婦人の学習
第18号	公共の場におけるマナー
第19号	精神衛生
第20号	ヨーロッパを考える
第21号	公衆衛生
第22号	千代田地区保健活動10年の総括
第23号	創造的農業者
第24号	団地生活を考える
第25号	食生活を考える
第26号	日本人の暮らしと住まい
第27号	地方都市とコミュニティ
第28号	わがコミュニティ
第29号	家族はこれからどうなるか
第30号	自然と人間
第31号	子どもの遊び場
第32号	コミュニティと広場
第33号	乗物と人間
第34号	ことわざとコミュニティ
第35号	主婦と生活時間
第36号	おやじの座を語る
第37号	社会と健康
第38号	災害とコミュニティ
第39号	日本の青年

第40号	コミュニティ——10年
第41号	民話とコミュニティ
第42号	余暇とコミュニティ
第43号	CATVとコミュニティ
第44号	ゴミを語る
第45号	社会福祉の国際比較
第46号	親族問題の諸相
第47号	わがまち——その財政
第48号	保健・福祉とコミュニティ・
第49号	オーガニゼーション
第50号	企業とコミュニティ
第51号	人間の居住環境とコミュニティ
第52号	身のまわりの安全
第53号	山村女性の生活変動
第54号	近所づきあいのコソ
第55号	手づくりの地域文化
第56号	各国家族の新しい動き
第57号	コミュニティと土地利用
第58号	川とコミュニティ
第59号	日本の高校生・アメリカの高校生
第60号	まちづくりの実験
第61号	主婦と職業
第62号	コミュニティ・センターの評価★
第63号	食料問題と農業のゆくえ
第64号	コミュニティと生涯教育
第65号	コミュニティと生活道路
	新しい地域保健をめざして

第66号	夫の役割・妻の役割
第67号	健康と食生活
第68号	子どもと教育
第69号	ことばと社会
第70号	商店街
第71号	ある漁村社会の移りかわり
第72号	集合住宅
第73号	住みよい暮らし
第74号	住区と施設
第75号	昔の主婦と今の主婦
第76号	東アジアの家族問題
第77号	少年非行
第78号	東アジアの地域社会
第79号	町内会★
第80号	日米コミュニティ・シンク
第81号	三つ子の魂百まで
第82号	ササニシキの村に生きて
第83号	むらづくり
第84号	都市化と寿命
第85号	国際化と日本語
第86号	企業と地域社会
第87号	都市とお墓
第88号	退職者の暮らし
第89号	科学と暮らし——21世紀への展望
第90号	デイズニールランドのまち
第91号	お年寄りの人間関係
第92号	地方紙の時代

- 第93号 お年寄りの使いやすい品物
第94号 日・中・韓の家族とコミュニティ
第95号 公共トイレを考える
第96号 市民農園
第97号 現代結婚考
第98号 青年会議所
第99号 小学生
- 第100号 日本のコミュニティ
第101号 人にやさしいまちづくり
第102号 生涯集
第103号 花と暮らし
第104号 外国人
第105号 超高層住宅の暮らし
第106号 空港とコミュニティ

第107号 祖父母と孫(新刊)

コミュニティ叢書

No.1 会社従業員の生活と意識―第一生命従業員調査―

編著 青井和夫／発行 地域社会研究所／取扱 国勢社
A4判・184頁・頒価850円

都心部から近郊農業地帯(神奈川県足柄上郡大井町)に社屋移転した第一生命の全従業員と配偶者を対象にした調査と分析。

No.2 大井町―地域社会の構造と展開(品切)

編著 福武 直／発行 地域社会研究所／発売 東京大学出版会
B5判・720頁・頒価2500円

神奈川県足柄上郡大井町……第一生命の理想的な「まちづくり」構想による移転とともに進んだ都市化と社会変容の研究。

No.3 都市生活者の生活圏行動―第一生命従業員調査―

編著 高山英華／発行 地域社会研究所／取扱 国勢社
A4判・188頁・頒価1600円

東京のサラリーマンとその家族の日常生活と行動は? 行動地図、調査集計表を多数収録。

No.4 大井町開発基本計画

編著 日笠 端／発行 地域社会研究所／取扱 国勢社
A4判・128頁・頒価2000円

市街化が進む近郊農業地帯(神奈川県足柄上郡大井町)にみるコミュニティ・プランニング。

No.5 恒心会員の歩み―岡山県の創造的農業者―

編著 並木正吉／発行 地域社会研究所／取扱 国勢社
B5判・220頁・頒価1500円

優秀な若い農業者の歩みを十数年にわたって追跡。その業績を幅広く視野に立って評価。

No.6 農漁村社会の展開構造―秋田県由利郡金浦町―(品切)

編著 福武 直／発行 地域社会研究所／発売 東京大学出版会
B5判・380頁・頒価2800円

産業経済・社会・政治の諸構造をはじめ、生活改善・教育など広範な変化と現状を歴史的過程をふまえて論及。

No.7 地域社会の形成と教育の問題―神奈川県大井町―

編著 松原治郎・小野 浩／発行 地域社会研究所
発売 東京大学出版会／B5判・267頁・頒価2400円

都市化が進展する近郊農業地域における社会構造の変化を教育問題に焦点をあてて分析。

No.8 農山村社会と地域開発―神奈川県大井町相和地区―

編著 福武 直／発行 地域社会研究所／発売 東京大学出版会
B5判・410頁・頒価4500円

第一生命の進出、東名高速道路の貫通によって変容した農業地帯の諸問題を分析。

No.9 企業進出と地域社会―第一生命本社移転後の大井町の展開―

編著 福武 直・蓮見音彦／発行 地域社会研究所／発売 東京大学出版会
B5判・563頁・頒価6400円

第一生命本社移転から十年後、神奈川県大井町の地域社会はどのように変化し、当初の計画はどう具現されたか。

講演録

歴史的時間と人生・ハンガリーにおける高齢者の家族生活と自殺の問題
グレン・H. エルダー、ジュニア レズロー・チェスツオンパティ 監修 青井和夫
A5判・100頁・頒価900円

No.10 健康農村活動と地域社会―羽生市千代田地区―

編著 青井和夫・宮坂忠夫／発行 地域社会研究所／発売 東京大学出版会
B5判・353頁・頒価7000円

昭和三十一年から十年間継続された健康農村活動を、その十数年にわたって追跡調査。

No.11 学習社会の成立と教育の再編―長野県上田市―

編著 松原治郎・久富善之／発行 地域社会研究所／発売 東京大学出版会
B5判・510頁・頒価8000円

上田市の教育総合調査をもとに、学校教育をはじめ各種の教育の社会化の可能性を探る。

地域社会研究所設立30周年記念国際シンポジウム講演録
21世紀のコミュニティの未来像
ジャン・ゴットマン 他／A4判・92頁・頒価2000円

調査研究報告書

都市化と寿命の關係に関する研究

— 東京都と大阪府の比較を中心に —
保健医療社会学研究会 (代表 園田恭二)

B 5 判・176頁・頒価2500円

浦安市舞浜地域開発の影響調査

浦安地域環境研究会 (代表 米林喜男)

A 4 判・96頁・頒価700円

廃棄物およびその処理に関する仙台市民の意識調査・研究

生活環境研究会 (代表 海野道郎)

A 4 判・79頁・頒価500円

土地買ひ占めによる地域社会集団の変容に関する生活論的共同研究

松平 誠 (立教大学)

A 4 判・72頁・頒価500円

地方中核都市における中心商業地の立体化と居住空間の変化

戸所 隆 (立命館大学)

A 4 判・77頁・頒価500円

大企業退職者の生活史と老後観

— ライフドキュメントと統計分析 —

地域高齢者研究会 (代表 湯沢雅彦)

B 5 判・254頁・頒価1600円

高齢者の身体的機能の変化に対応する商品の調査研究

商品科学研究所 (代表 三枝佐枝子)

A 4 判・220頁・頒価3000円

女性から見た高齢者施設の居住性の検討

高橋公子 (日本女子大学)

A 4 判・177頁・頒価2500円

高齢者居住施設の改善方策に関する検討

林 千代 (淑徳短期大学)

A 4 判・242頁・頒価2500円

高齢者が快適に暮らせる社会施設の条件の調査研究

商品科学研究所 (代表 三枝佐枝子)

A 4 判 (全2冊)・360頁・頒価5000円

転換期コミュニティ施策の展開と地域形成過程に関する実証研究

— 宮城県および神戸市を事例として —

吉原直樹 (東北大学)

A 4 判・67頁・頒価500円

高層集合住宅における社会的ネットワークの形成と孤独感

諸井克英 (静岡大学)

A 4 判・87頁・頒価500円

住環境教育に関する研究 — まちは子どものミュージアム —

曲田清維 (愛媛大学)

A 4 判・88頁・頒価500円

小学生の生活時間研究

生活時間と生活構造研究会 (代表 湯沢雅彦)

A 4 判・105頁・頒価2600円

健康づくりと健康なまちづくりに関する調査研究報告書

園田恭一 (東洋大学)

A 4 判・56頁・頒価650円

郊外に居住する高齢者のハウジング環境に関する実証研究

荒井良雄 (東京大学)

A 4 判・156頁・頒価500円